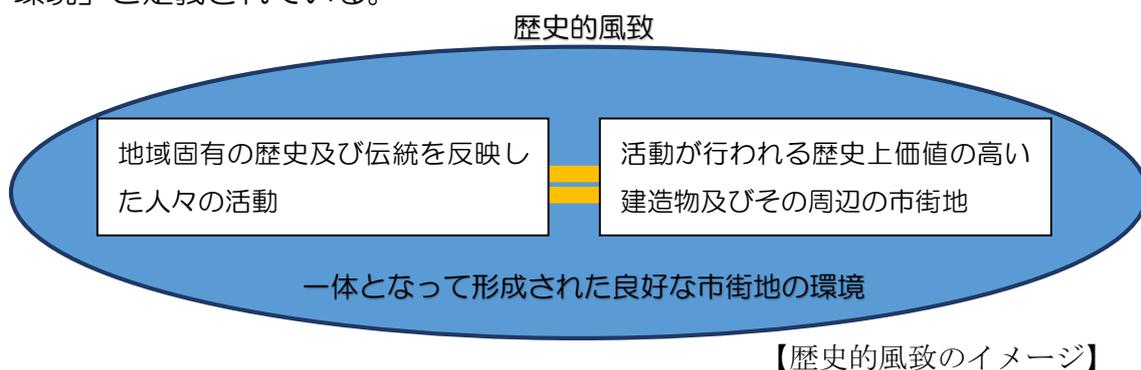
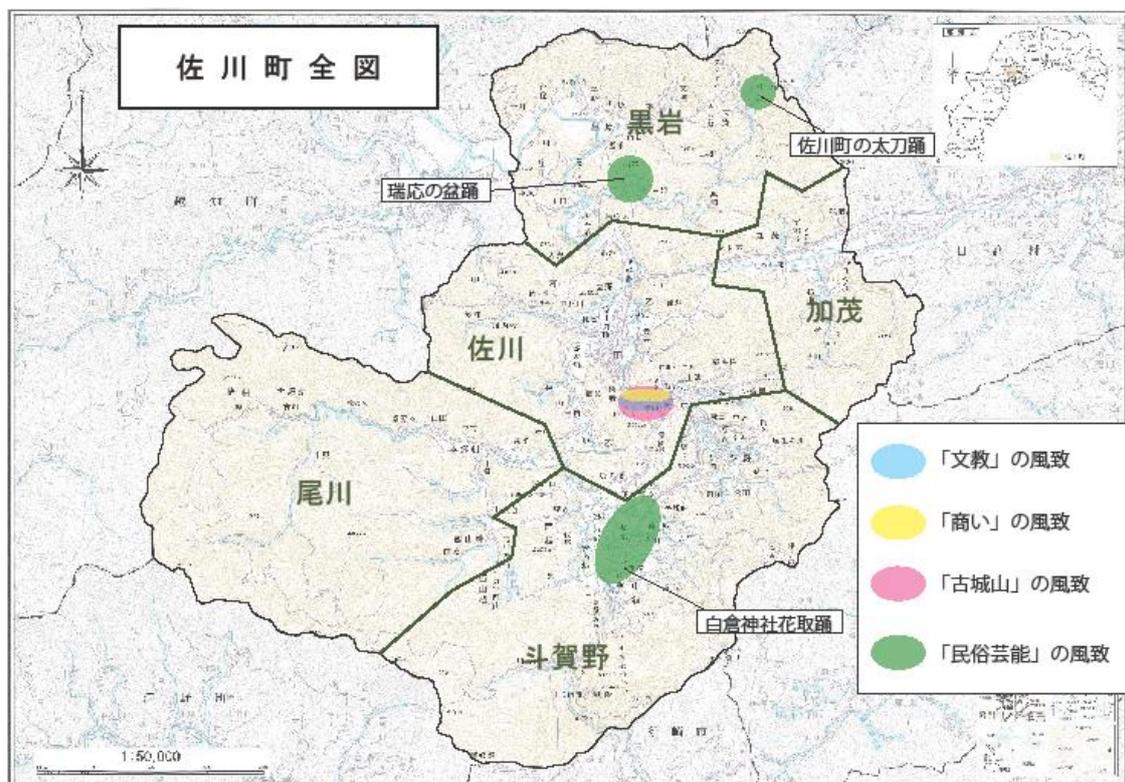


第2章 維持及び向上すべき歴史的風致

「歴史的風致」とは、歴史まちづくり法第1条において「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動と、その活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地が一体となって形成してきた良好な市街地の環境」と定義されている。



佐川町における維持・向上すべき歴史的風致は次のとおりである。



【佐川町の歴史的風致位置図】

1. 「文教」が醸し出す歴史的風致

(1) はじめに

佐川町は、町内外から「文教の町」と評されている。これは、江戸期、土佐藩筆頭家老であった佐川領主^{ふかお}深尾氏が代々文教施策に力を入れ、その結果、多くの学者や政治家、文化人を輩出したことに由来する。

「文教」とは、学問・教育によって人を教化する、若しくは教育行政の意である。つまり、文教は概念的なものであり、その有り様や成果が実体的に顕在化しにくい側面も有しているが、逆に言えばそれ故にこそ人々の心の中に確かに根付いているものだといえる。

佐川町民は、佐川が深尾氏の城下町であったこと、そして、文教の伝統が脈々と継承されていることに誇りを持っている。

文教は、佐川の歴史や文化の基底に流れており、当然、人々の心の中に通底している。

(2) 佐川の文教の歴史

① 名教館

佐川領主深尾家は、代々文教施策に力を入れた。安永元年（1772）に6代茂澄^{しげすみ}が一族の教育のために、高知城下から山本^{やまもと}日下^{にっか}ら著名な学者を招き^{ふかお}深尾^と土居^ど邸内に家塾を開いたことに名教館の歴史ははじまる。享和2年（1802）、7代繁寛^{しげひろ}が家臣の子弟教育の場として、これを郷校^{ごうこう}に改めた。



【名教館】

そして、天保元年（1830）、9代重教^{しげのり}が萩^{めいりんかん}の明倫館（長州藩の藩校）になり菜園畑^{さいえんばた}（現在の高知県中央西保健所及びその東方）に校舎を移して、広大な文武館を配置、その中に名教館を建築した。

佐川領主深尾家の名教館を中心とした教育は、様々な成果を上げた。

その一つが - 第1章（2）わが町が輩出した主な人々 - で記したように、学問や政治、文化など色々な分野で活躍した人々を世に出したことである。そ

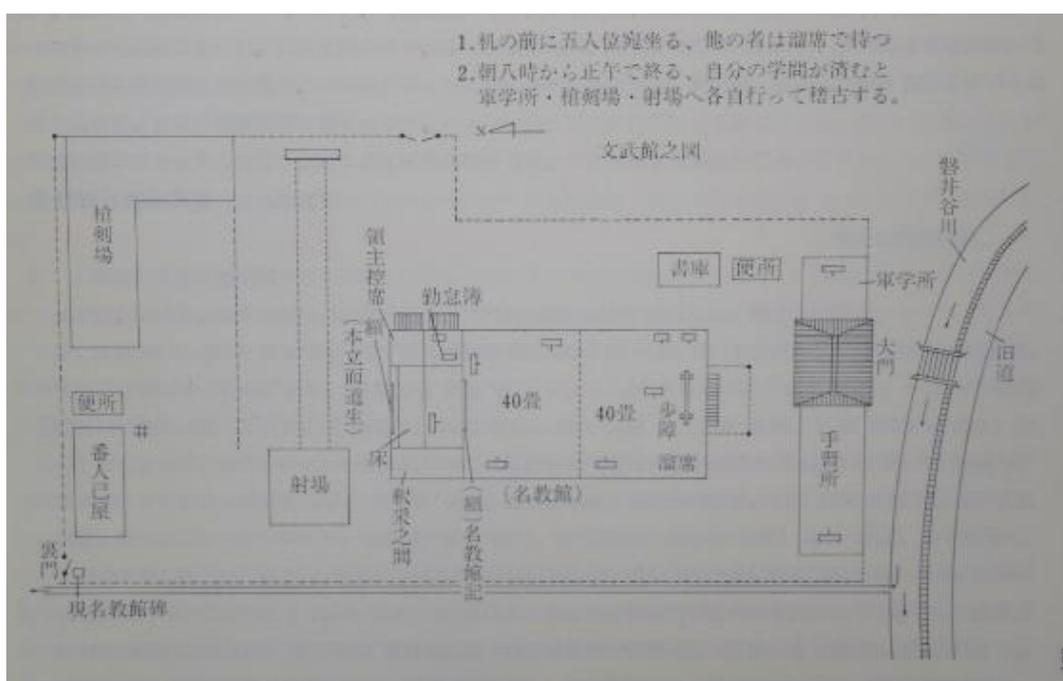
の大半が名教館を築立った、あるいは関わった人々である。

その一端として田中光顕の語ったものから引用すると、『^{かなえ} 鼎（深尾鼎・第10代領主）といふのは当時の所謂^{いわゆる}ハイカラで、長崎へ人を使わして医師の^{けいこ}稽古をさしたり、豊後の村上幸造^{ぶんご むらかみこうぞう}という剣客^{しやう}を聘したり、また武市瑞山先生^{たけちすいざん}を高知から迎えて武術の指南をさせたり、なかなか文武の道を励んだものであった。而して^{しこう} 鼎自身も多芸多才の士で、早くから西洋の文物を佐川に輸入した。自分（光顕）なんかも六歳の時既に種痘^{しゅとう}をしたが、今から67、8年も前に佐川の山奥で種痘が出来たというのは、なかなか進んだものであった』（「田中青山伯^{せいざん}」・大正6年刊）とあり、進取の精神で文教を重んじた様子^{しやう}がうかがわれる。

江戸時代の名教館は、土佐藩の藩校と競うほど充実した内容を誇る学館であったと伝わっており、家塾名教館を創設する際に^{しょうへい} 招聘した^{じゆか} 儒家山本日下家の当主が代々学頭（校長）を世襲^{せしゆう}し教育に当たってきた。

明治維新、その後の^{はんせきほうかん} 版籍奉還を迎え、領主深尾家の位置付けや世の中が大きく変わったことにより、明治2年（1869）、名教館は土佐藩に^{けんじゆう} 献上され、深尾家の経営による郷校名教館は閉校となるが、すぐに藩校の支校（分校）とされたため、学校自体の廃校は免れ、佐川の人々の^{まなびや} 学舎として存続される。

幕末時の名教館は次図のとおりで、入口は南に面して大門があり、この^{やぐらもん} 櫓門の両側の部屋も学館として使用され、習字場、軍学室があった。



【名教館の図面 - 出典：「わが町の文化財と旧跡」】

名教館の建物のうち、講堂は幅5間（約9.1m）奥行11間（約20.0m）、その正面の玄関は幅2間半（約4.5m）奥行2間（約3.6m）、深尾家家紋梅鉢紋を虹梁間に掲げている。

この建物は、廃校の後は佐川小学校の建物として一時使用され、佐川小学校の校舎が別に新設された後の明治20年（1887）に、玄関と建物の一部が佐川尋常小学校へ移築され、同校のシンボルとして在りし日の栄光を伝えていた。昭和40年（1965）、同校の大改築の際、取り壊されそうになったものを町民の尽力により記念館として同校内西北隅に移転保存されていた。しかし、文教のまちのルーツであるシンボリックな施設が一般の目に触れにくい状況にあることに対して、町民の中からも移築を望む声が出て、平成23年（2011）に佐川町歴史的風致維持向上計画の重点区域内に移設された。

当初、名教館が建てられた菜園畑には「名教館址碑」が建っている。



【講義風景の展示】



【名教館址碑】

コラム「文教の礎」^{いしづえ}

○ 伊藤蘭林^{いとうらんりん}（第1章 - 3 - (2) わが町が輩出した主な人々・参照）
名教館の教授であり、多くの門弟を育て、文教の町の礎を築いた最大の功労者の一人。その生誕地である目細谷^{めほそだに}には、町民有志の活動により「伊藤蘭林顕彰碑」が建立され、「蘭林公園」の称で親しまれる公園として整備され憩いの場となっている。



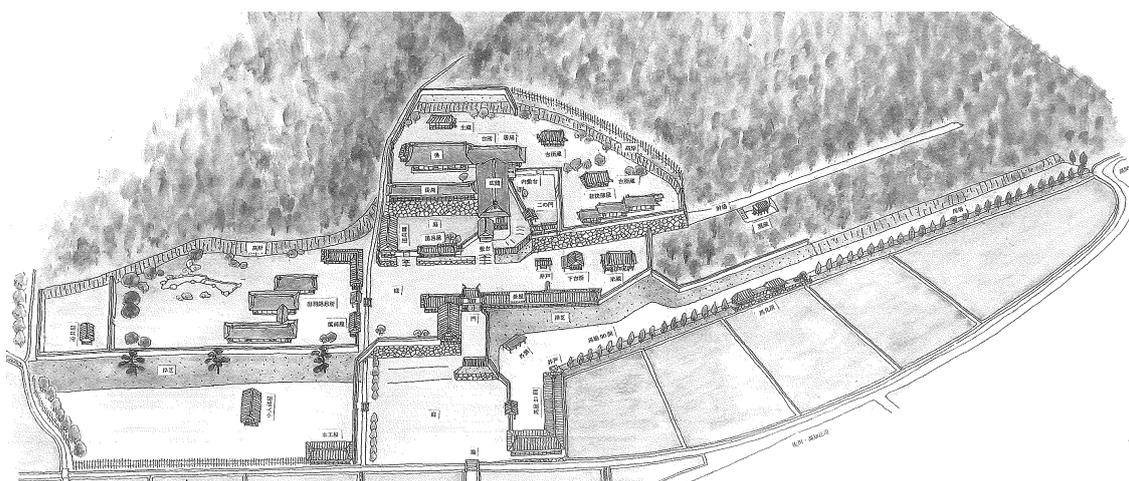
【伊藤蘭林顕彰碑】

コラム「深尾の^{よすが}縁を^{しの}偲ぶ」

○ 深尾土居邸址（ふかおどいていし）



【幕末期の深尾土居邸】



【深尾土居邸俯瞰図 - 出典：『霧生関 第48号』 - 】

佐川領主深尾氏は、幕府の一国一城令により古城山の佐川城を取り壊し、その翌年（元和2年（1616））、その東麓の磐井谷の居宅と政庁を兼ねた土居屋敷で政務をつかさどった。

深尾土居屋敷の広さは、東西71間（約129.1m）、南北178間（約323.6m）で、総面積約42,000㎡の広大なものだった。

土居屋敷の周辺には、家臣たちの家が建ち並び、土佐藩筆頭家老一万石の威容を示して、以来11代、268年間、明治に至るまで、高北地域（高岡郡の北部の意味）の中心であった。



明治 2 年
 (1869) の^{はんせき}版籍
^{ほうかん}奉還に伴い、深尾
 領一万石は消滅し、
 土居は総て取り壊
 され、深尾氏は高
 知市へ移転を命じ
 られた。

【深尾土居邸の復元模型（縮尺 1/20） - 製作：栗田真二氏 - 】

○ 青源寺（せいげんじ）



【青源寺（春）】

青源寺（庭園が県名勝指定）は、深尾家の
^{ほだいし}菩提寺である。同寺の裏山には深尾家歴代一族
 の墓所があり、2m 余りの豪壮な墓碑が立ち並
 んでいる。



【深尾家墓所】

○ 深尾神社（ふかおじんしゃ）



【深尾神社】

佐川領主初代の^{ふか おいすみしげよし}深尾和泉重良と正室、2
 代^{しげまさ}重昌と正室、以下歴代の霊位を祭る神社。
 重良の 200 年忌に当たる天保 2 年
 (1831) の翌年に創建された。創建に当
 たり^{みの}美濃以来^{しんじゅう}臣従する^{ふだいかしん}譜代家臣 18 人が
 献納した県下にも珍しい木彫の^{こまいぬ}狛犬が今
 も残っている。

現在も同社で春と秋の年 2 回「深尾神社
 大祭」がおこなわれており、その際には深尾家の子孫や地元の有志 20 人以上
 が集い、深尾家の歴史に思いを馳^はせている。

コラム「勤王の志士」

明治維新前夜の激動の時代にも、佐川の教育を受けた若者たちの活躍があった。

文久元年（1861）、^{たけちはんぺいた}武市半平太を盟主として結成された^{と ききんのうとう}土佐勤王党の加盟者を記録した「土佐勤王党血盟者姓名簿（写）」には 192 人の名前が認められるが、その中には 12 人の佐川人が含まれていた。

やがて時代は、半平太投獄に象徴される土佐藩の勤王党に対する弾圧へと展開する。佐川勤王党の若き志士たちは、このまま座して死すよりはと、死を賭した脱藩の道を選ぶことになる。

その若者たちの名前と当時の年齢を記す。^{はまたたつや}浜田辰弥（22 歳・後の田中光顕）、^{いはらおうすけ}井原応輔（23 歳）、^{いけだいろく}池大六（28 歳）、^{な すもりま}那須盛馬（29 歳・後の片岡利和）、^{かたおかとしかず}橋本^{はしもと}鉄猪（30 歳・後の大橋慎）の 5 人である。

脱藩の集合場所であった^{あかつちうげ}赤土峠には、昭和 14 年（1939）に「脱藩志士集合の地」の記念碑が建てられた。その題字は深尾家第 13 代深尾隆太郎の筆による。題字の上部には、後年田中光顕が詠んだ「真心のあかつち坂に まちあわせ いきてかへらぬ誓なしてき」の歌が刻されている。

この 5 人を始め佐川勤王党の志士たちは、殆どが名教館で^{くんとつ}薫陶を受けた人々である。



【脱藩志士集合の地の碑】

② 名教館から名教義塾に継承

版籍奉還・^{はいはんちけん}廃藩置県を経て、土佐藩自体の消滅により藩校が廃されたが、そこで文教の地佐川の底力が発揮される。普通なら本元の藩校が廃止されたのだから、その支校（分校）である名教館も廃止となる。しかし、有志たちの活動により「^{めいこうぎじゅく}名教義塾」として存続することが叶った。いわば^{よみがえ}甦った。

時の名教館教員、^{ながのりょうきち}永野亮吉、^{あさだそり}麻田反等により学業の中断を補うため「名教義塾」が開かれ、高知から英語教育のために^{ながおばいけん}長尾梅軒、^{やのはつきち}矢野初吉を招聘した。この二人は当時県下唯一の英語学者であり、文教の町佐川であればこそ、招聘に応じたのであろう。

この「名教義塾」がいつ開校したかについて、文献には正確な記載がないが、^{はいはんちけん}廃藩置県が明治4年（1871）でありその後藩校が廃されていることから、「名教義塾」の時代は学制頒布（明治5年（1872））までのわずかの期間となるが、有志により名教館精神を継続させたことは、特筆すべき画期的なことだといえる。

この頃には町民にも門戸が開かれ「日本植物学の父」として名高い植物学者^{まきのとみたろう}牧野富太郎も通っている。後に『その時分に^{よほど}余程難しい英語の書物などを平気で読んで授けられた。（中略）この英語の早く佐川に入って居たということは後になって小学校の授業の時など大分利益があった。比較的正確な材料を佐川の学校では使っていた』（『^{きりゅうぜき}霧生関第25号』・明治44年刊）と記している。

しかし、明治7年、新しく制度化された学制により佐川小学校（^{めいこうがくしゃ}名教学舎）が創設されると「名教義塾」は廃校となり、100年を越す歴史の幕が下ろされた。なお、公教育となって当初は「名教学舎」の呼称であったが、明治8年（1875）、校称は地名を以て表すべき、との明治政府の通達があって以後、佐川小学校と改名された。

③ 「^{せいざんぶんこ}青山文庫」に文教の継承

I 寺子屋教育

江戸時代末期になると、士分以外の人々にも教育に対する^{どうけい}憧憬と熱望は広がり、私塾では士族子弟とともに平民も授業を受けた。これは、伝統の名教館に学んで、学問を身につけた士族が私塾を開く事例が多かったため、藩政末期から小学校令以前の佐川の寺子屋教育はとくに高揚した。

児童が 8, 9 歳位になると、勉学に心ある父兄は年の初めに子どもを伴って、師匠の家に洒肴など携えて入門を願い、正月 17 日に習い初めという入門式をおこなって師弟の契りを結んだ。

授業は五つ時（午前 8 時）に始まり、八つ時（午後 2 時）に終了した。就学は 8 歳頃から 14 歳までの間でまちまちだったが、授業時間中に居眠りでもすると、兄弟子から顔に習字の墨を塗られる罰を受けた。

寺子屋教科の中で多く使われたものは「^{おうらいもの}往来物」で、土佐国産往来、商売往来、地理名勝往来などであった。少し進むと小学、大学、^{ちゅうよう}中庸、孟子などの素読となった。女子には女小学、女大学などの読習があった。

この寺子屋教育の佐川での始まりの時期については、『佐川町史』等の文献にも定かには記されていないが、一般的には「寺子屋」は室町時代末期にでき、江戸時代中期（18 世紀前半）に広まったと言われていることから、佐川でもそれに準じて考察すると、地方であるため多少の時差は生じることを考慮して、江戸時代中期又は後期に次第に盛んになり、幕末（1850～60 年代）から学制頒布の明治 5 年（1872）の間までが特に盛んになったと推測される。

注釈：^{おうらいもの}「往来物」

平安時代後期から明治時代初頭にかけて、主に往復書簡などの手紙類の形式をとって作成された初等教育用の教科書の総称。

II ^{がくもんむら}学問村

大正 7 年（1918）建立の「学問村の碑」には、明治新時代を振り返り、そのころの青少年の学問探究の熱意が刻まれている。碑文には『^{とりのす}鳥ノ巣に下士の武家 18 戸あり、山崎正寛（読み不明）、^{ながの ちかすけ}永野親亮、^{よしもとじゅんきち}吉本順吉の三先学（いずれも名教義塾教授）とともに^{やがくかい}夜学会を開き、勉学に勤しむこと数年、人々は学

問村と称した。人生は無常であり山河もまたうつろう。世に伝えるためにここに刻み、後人に学問の大切さを告げる』(原文は漢文・口語訳：土居香国)とある。

藩政末期、鳥ノ巢には18戸の武家が居住。全て下土級の^{こじゅうしよく}扈從職以下であった。しかし、この人たちが事実上の領政を担っていた。

明治新政府となって、上士の大部分は高知市へ転居したが、郷里にとどまって後輩の育成に当たったのが先述の三先学であった。いずれも下土から登用されて名教館の教授となった人々である。こうした名教館の先達の薫陶を夜学会で受けた門下生は、いずれも明治、大正時代に教員、医師、政治家、官僚とそれぞれの道を栄進して、日本の新時代を築く活躍をなしている。



【学問村の碑 - 下から望む - 】



【学問村の碑】

III ^{せいねんやがくかい} 青年夜学会

尋常小学校6年、若しくは高等科2年の課程をもって普通に教育年限の終了とした昭和初年頃までは、小学校教育の補習並びに社会的教養を身に付ける勉学の唯一としたものは、各町村校下又は集落単位の青年夜学会であった。青年夜学会は、夜間に小学校や集落公会堂に集まって勉学した。その教師には名教館で薫陶を受けた者を始めとして、小学校教師や^{とくがくしゃ}篤学者、^{そんり}村吏があたった。佐川には夜学会が数多く作られ、文教の伝統と当時の青年の向学心がうかがわれる。

それらの夜学会の一端を列挙する。

☆ () は、創立年。出典：全て『佐川町史下巻』

- ・黒原夜学会共立社 (明治15年) ・尾川共愛会 (明治16年) ・佐川公正社 (明治16年) ・佐川私立英学舎 (明治19年) ・尾川英進会 (明治20年)
- ・佐川奨学会 (明治20年) ・佐川理学会 (明治22年)

IV ^{さかわどうしかい} 佐川同志会

明治 29 年（1896）、佐川高等小学校（現在の佐川中学校・以下「佐高小」）の卒業生や地元の若い有志を中心に組織された団体。その多彩な活動は、佐川の教育に大きな影響を与えた。その中でも特筆すべきは、「佐川同志会奨学金二関スル規約」と「佐川同志会文庫規則」をつくって、その愛郷、愛校心を具体的に実践したことである。

奨学金の規約にはこうある。

「第一条 本奨学金ノ目的ハ初等教育ノ完了ヲナラシムニアリ

第二条 本奨学金ハ寄附ヲ以テ之ニ充ツ

第三条 …尋常小学校卒業生徒中学力品行共ニ優等ニシテ家計ノ都合ニヨリ高等小学校へ入学シ得ザル者ニ学費ヲ給与ス」

また、文庫規則は、同志会が提供した書籍の文庫を佐高小内に設置し、生徒たちの勉学の用に供することを目的としていた。これも文教の町ならでの奨学精神の表れである。

V ^{きくすいかい} 菊翠会

昭和 13 年（1938）、田中^{た なかゆする} 遜氏（田中光顕養子）の多額の寄付金によって、佐川小学校講堂、佐川高等女学校家庭科教室などが建築された。その後、寄付奨学資金運営のため「菊翠会」が創立され、青少年教育の育英に資した。昭和 54 年（1979）に解散されたが、その間多くの優秀な青少年を育成した。

VI ^{せいざんかい} 青山会

大正 14 年（1925）、田中光顕の寄付を元手にその雅号^{せいざん}青山をとって「財団法人^{せいざんかい}青山会」が組織された。そして「川田文庫」を「青山文庫」と改称し、青山会の理事により文庫の管理、運営をするようになった。

昭和 38 年（1963）、青山文庫が高知県に譲渡されて県立郷土文化会館の分館となってからは、青山会は、後に残された旧川田文庫の図書を蔵する旧青山文庫（（3）歴史的建造物 - ①佐川文庫庫舎（旧青山文庫） - を参照）を「佐川文庫」と改称して、これの保存、管理に努めた。

昭和 53 年（1978）、佐川文庫が佐川町に譲渡されて郊外にある佐川町総合文化センターの敷地内に民具館として移築されたことから、青山会は存続

の必要がなくなったため、半世紀にわたった郷土の文化的先端の組織を解散した。

VII 明治、大正、昭和の佐川の俳壇・歌壇・詩壇

文教の地として、明治・大正・昭和の各時代、俳句・短歌・詩に関わる人々の活動は隆盛であった。結社の名称等紹介する。

俳壇	明治	「時雨会」「其門の集い」
	大正	「正正社」「有楽会」「橘会」「せせらぎ吟社」
	昭和	「曲水支社」「ぬなわ句会」「高北俳句同好会」「河鹿俳句会」「青山句会」
歌壇	明治	「狂歌の集い」「鎮花の観楓」「勤王観月会」
	大正	「蘭燈詩社」「愧恨詩社」「南人支社」
	昭和	「短歌芸術支社」「高知歌人支部」
詩壇	明治	俳句、短歌のように結社の活動はなかったが、詩集出版等の活動が見られた。
	大正	
	昭和	農民運動の詩人として知られる ^{たむらおとひこ} 田村乙彦（佐川町出身）の機関誌「田園の花」の活動などがあつた。

これらの文化活動の代表的、かつ、集大成的なものが、次に紹介する「霧生関」^{きりゆうげき}である。

VIII 霧生関^{きりゆうげき}

明治期から昭和期にかけて、佐川人の文教精神の発露は、文化・文芸活動等に向けられた。

明治22年（1889）、当時の高知尋常中学校（現在の追手前高交）に在学する佐川出身の学生達によって「切塞会」^{きりうさぎかい}が結成され、機関誌として「切塞」が創刊された。当時20人ばかりだった会員の作品や、有志の寄稿した論文、随筆、史談、文芸、小説などで編集された。明治31年になり会員も増加したので、会費と町内有志の寄附により、第10号から活版印刷とし、誌名を『霧関』^{きりうさぎ}と改めた。

明治33年（1900）、田中光顕伯の肝いりによって、在京佐川町出身学生の寄宿寮として、「麗沢舎」^{れいたくしや}が設立された。そこで、在京学生と郷土出身有志、

在郷有志と学生の 4 者の交流を図るために、毎年 1 回機関誌を出すことになり、『霧関』を譲り受け『霧生関』と改めて、第 16 号から発行した。掲載は、やはり名教館出身者の作品が多かった。以来大正 11 年（1922）33 号まで年 1 回発行し続けた。その内容はバラエティに富み、論説、学芸、文学、伝記、随想など佐川の古老から若者まで、時には田中光顕、牧野富太郎、^{ひろい いさみ} 広井 勇を始めとした佐川先達が寄稿した。

発行停止となった理由は、大正 12 年（1923）の関東大震災により「麗沢舎」が焼失し、発行どころではなくなったことと、メンバーの死亡、老齢化もあり再開までには到らなかった。

その後、昭和 55 年（1980）に、かつての意志を受け継ぐ形で「佐川史談会」により復刊、以来連綿と発行し続けている。そのバックナンバーを揃えたら、佐川の歴史全てが分かるというほどの充実したものである。



【霧生関】



【復刊
霧生関】

佐川小学校、佐川中学校の校歌には、文教精神の継承が^{にょじつ} 如実に表れている。作詞は土井晩翠（夫人八枝が佐川町出身）、作曲は外山国彦（^{とやまくにひこ} 声楽家・佐川町出身）である。それぞれ文教精神が表れている詞を抜粋して紹介する。

- ・ 佐川小学校 - 名教館の昔より 学びの道にほまれある
佐川の里に生ひたつ子…
- ・ 佐川中学校 - ああ わが佐川 文教の
ほまれいみじき うまし里…

コラム「校歌にも文教」

(3) 歴史的建造物

① 佐川文庫庫舎（旧青山文庫）（町指定有形建造物）

次に紹介する「佐川町立青山文庫」の前身ともいえる施設である。

明治19年（1886）に、須崎警察署佐川分署として上町（現在地）に建てられた県下最古の白亜の木造洋館である（「わが町の文化財と旧跡」による）。

木造二階建寄せ棟造り棧瓦葺。建築面積60.60㎡。基礎部分には切石を使用しており、上部に木造二階建の構造が乗る。正面側は5間で、出入り口部分にガラス戸の両開き戸を入れ、その両側に対称的に上げ下げのガラス戸が付き、それぞれには外側に鎖状の開き戸が取り付けられる。

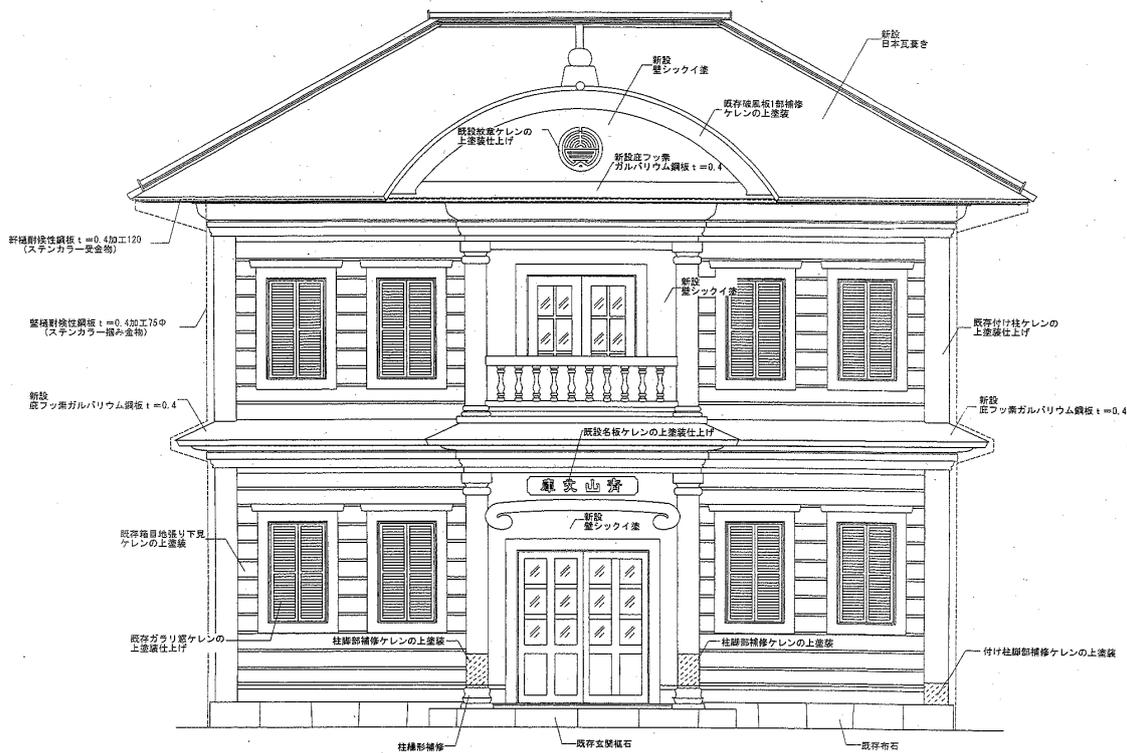
二階も同じ意匠だが、特に印象づけるものは正面入口の一階の出入り口屋根を兼ねた二階のテラスで、二階のアーチ状屋根、一階正面の「青山文庫」の看板が乗った高梁、二階ベランダの手摺り、一階と二階の円通形通し柱などは、この建築の意匠として大きな特徴を出している。

昭和5年（1930）には、青山文庫の「会堂兼特別閲覧室」として利用するため、西町に移築された。昭和53年（1978）、民具館として活用するため、郊外にある佐川町総合文化センター敷地内に再移築された。

平成21年（2009）、元の位置に復元して欲しいとの町民からの声も挙がり「歴史まちづくり事業」により上町に再々移築した。



【佐川文庫庫舎】



【佐川文庫庫舎正面図 - 出典：『平成 21 年度佐川町文化財建造物調査』】

② 佐川町立 ^{せいざんぶんこ} 青山文庫

昭和 38 年（1963）、奥の土居に博物館として建築された。当初は、「高知県立郷土文化会館分館青山文庫」として開館した。鉄骨造・地上 1 階・延べ床面積 494 m²。展示室が大と小の 2 室。収蔵書庫が 1 室。その他玄関ホール、事務室等の構成となっている。

この「青山文庫」の敷地は、第 1 章 - 3 歴史的環境 - (2) わが町が輩出した主な人々 - で紹介した土方寧 ^{ひしかたやすし} 邸があったもので、江戸時代中期の美しい回遊式庭園が今も残っている。

昭和 63 年（1988）、高知県は、青山文庫の運営を佐川町に委託。平成 3 年（1991）、高知県は、青山文庫を佐川町に譲渡。その翌年、「佐川町立青山文庫」として再開館して現在に至る。

また、明治維新から 150 年の節目の記念として、平成 29 年 3 月 4 日から高知県内全域で「幕末維新博」^{ばくまついしんはく} が開催された（会期：平成 31 年 1 月 31 日まで）。「青山文庫」も会場の一つになったこともあり、また、建物も老朽化し

てきたことから、平成 28 年度に耐震改修工事をおこなった。その際に耐震改修に併せて、玄関の自動ドア化、外壁改修、展示ケースの一部新調等の施工もおこなっている。



【佐川町立 青山文庫】

③ まきの こうえん 牧野公園

明治 35 年（1902）に、佐川町出身の世界的植物学者^{まきの とみ たろう}牧野富太郎博士が、この時まだ高知県にはなかったソメイヨシノの苗木を郷里に送り、それを有志が^{おく とい}奥の土居（現牧野公園）に植樹した。これを契機に、奥の土居は、桜の名所となっていく。

その後、大正初期～昭和初期に桜は見頃を迎え、大人数の^{かんおう}観桜客で賑わった。



【花見の様子（大正後期）】

しかし、太平洋戦争時、桜は食糧増産の犠牲^{ぎせい}となり全て伐採され、公園は開墾地となった。

昭和 31 年（1956）、荒廃した公園を今一度甦^{よみがえ}らそうとしたのが、地元の人々であった。1,000 本以上の桜の苗を植え、桜復活に取り組み始めた。

昭和 33 年（1958）、牧野博士の名を冠して、牧野公園と名付けられた。

牧野公園は、平成 2 年（1990）、公益財団法人日本さくらの会創立 25 周年記念として「日本桜の名所 100 選」に選ばれた。



【牧野公園】

(4)「文教」の精神を継承する人々の活動

「歴史まちづくり法」で定義する歴史的風致の構成要素の一つである「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動」に触れる。

それは、「^{せいざんぶんこ}青山文庫にみる文教の歩み」と「^{まきの}牧野博士から継承する文教の歩み」の2つである。

① 青山文庫にみる文教の歩み

I ^{かわだぶんこ}川田文庫

名教館が文教の町のルーツであるとすれば、「青山文庫」は文教の歴史の果実といえる施設である。

青山文庫の歴史は、明治43年(1910)、当時の佐川郵便局長^{かわだとよたろう}川田豊太郎が私費をもって自宅(現佐川郵便局)内にあった^{さんしつ かいこ}蚕室(蚕を飼う部屋)の2階に高知県初の私設図書館「川田文庫」を設立したことに始まる。

一般公開された蔵書は、宗教・哲学・歴史・地理・伝記・数学・農業・商業・工業・文学など多岐にわたり、本の他に考古分野(化石・出土品などの標本)の展示も行われるようになった。



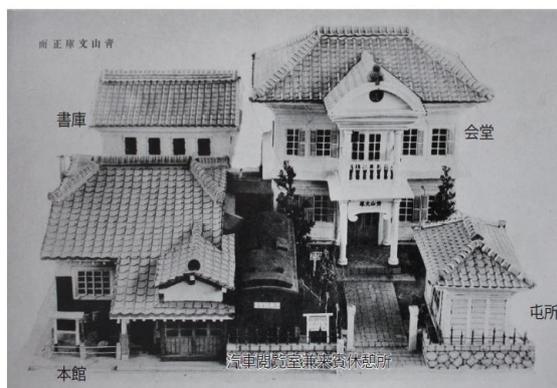
川田文庫玄関



川田文庫内の様子(右は川田豊太郎氏)

II ^{せいざんぶんこ}青山文庫

大正14年(1925)、川田の活動に感激した佐川出身の^{たなかみつあき}田中光顕による基金7,500円と蔵書1万数千冊の寄附を受けたことにより、運営体制をより本格的に改め、「本館(木造瓦葺洋風平屋、建坪28坪)」と「書庫(木造瓦葺2階建土蔵、建坪24坪)」を建築し、新しく財団法人^{せいざんかい}青山会が運営する「青山文庫」として



青山文庫全体(後方に郷土博物館と宝庫兼陳列館があった)

開館した。ちなみに「青山」は、田中光顕の
がごう
雅号である。

これ以降、田中光顕が収集した勤王の
しし
志士たちの遺墨コレクションや、田中が
かし
下賜された皇室関係資料など、貴重な資
料が次々と佐川に集積され、青山文庫は
図書館として活動しながら博物館要素を
強めていった。昭和5年（1930）には、
上町にあった佐川警察署の庁舎を譲り受
け「会堂兼特別閲覧室（木造瓦葺洋風2階
建、建坪36坪）」が移築され、昭和7年
（1932）には、「夜警屯所」や「汽車閱
覧室兼来賓休憩室（汽車2等客車）」が設
置された。さらに、昭和9年（1934）に
は「宝庫兼陳列館（コンクリート造2階建
倉庫、建坪64坪）」と「郷土博物室（木
造亜鉛板葺洋風平屋建、建坪10坪）」が
完成し、青山文庫は次々と発展していっ
た。

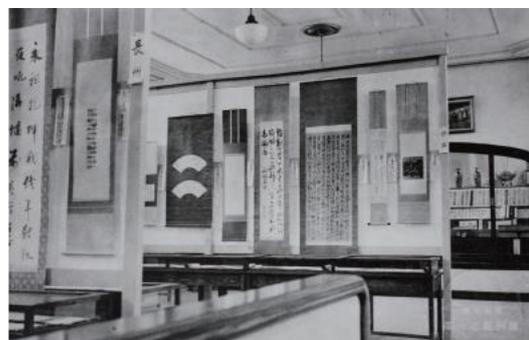
しかし、戦前・戦中の世相の変化により
経営が困難となったため、昭和22年
（1947）、運営を佐川町に委託。昭和27
年（1952）、青山文庫は、博物館相当施
設に指定される。昭和34年（1959）、
佐川町は、町出身でその生涯を『セルボ
ーンの博物誌』の翻訳と研究に捧げた
にしたにたいそう
西谷退三の蔵書コレクションを一括購入
し、青山文庫に収蔵した。このコレクショ
ンは、和書と洋書を合わせて約10,000
冊にものぼり、『セルボーンの博物誌』や『解体新書』、ダーウィンの『種の起
源』の日本最初の和訳本など、多数の稀少本きしょうほんを含んでいる。



宝庫内の皇室関係奉安庫



汽車閲覧室



宝庫内の陳列の様子



宝庫内の勤王偉人室

現在の青山文庫は、開館当時から蓄積されてきた幕末維新期の貴重資料を中心とした歴史系博物館として佐川町が運営している。

収蔵資料の大多数は田中光顕やその子孫から寄附された「田中文庫・田中家寄贈資料」であり、この中に「田中光顕収集コレクション（通称「志士たちの遺墨」）が含まれている。

この他には、前記の西谷退三の蔵書コレクションが「西谷文庫」としてあり、また、江戸時代の佐川領主深尾家にまつわる資料群である「深尾家関係資料」がある。群としてのまとまりに欠けるものの、幕末から近代にかけての様々な資料を数多く収集している。

以上、「青山文庫」はその収蔵する史料の価値が非常に高いことから、よそから多くの歴史研究家などが来訪するが、「佐川史談会」や「古文書研究会」、その他歴史愛好家など町内の人びとも史料研究や会合の場としてよく活用しており、いわば文教のサロンともなっている。こうして人びとが集う過程で、郷土史の不詳部分の解明、新史料の発見等様々な成果を生んできたが、その中でも特筆すべきは、文庫の学芸員が中心となり、ここに集う人びとの協力の下に編纂した『歴史街道佐川』の出版である。この本は、深尾氏のルーツ他佐川町の歴史、日本史の視点から見た佐川史など、綿密な研究を下地に多角的かつ重層的に記されており、平成10年と18年の2回にわたって出版された。



【『歴史街道佐川』】

左：H10年刊・右：H18年刊

伝統の再興も行われている。佐川ならではの料理の研究をしている有志のグループが、青山文庫の史料を基に、深尾時代からの伝統的な菓子である山椒餅^{さんしょうもち}を往事の調合を調べて復活し、商品化した。また、深尾家正月^{のりぞめ}馭初料理献立の長巻を調べて、その献立を再現する試みなども行われている。

「佐川文庫庫舎（旧青山文庫）」においても、文教の歴史を体現する県下最古の木造洋館としての価値性から、歴史家や建築家の研究対象となっており、その内部・外観等の調査が系統的におこなわれている。

また、住民の絵画、写真、詩歌等の発表活動の場所としても頻繁に活用されている。



【青山文庫展示室】

こうした青山文庫の文教サロンの伝統は、既に記した人々の様々な取り組みから継承されてきたものである。

② 牧野博士から継承する文教の歩み

I 佐川理学会

(2) ③「青山文庫」に文教の継承 - Ⅲ青年夜学会 - でも触れたが、教育の課程がまだ不十分であった昭和初年頃までは、小学校教育の補習並びに社会的教養を身に付ける勉学の唯一としたものは、各町村校下又は集落単位の青年夜学会であった。青年夜学会は、夜間に小学校や集落公会堂に集まって勉学した。佐川では青年夜学会が数多く作られた。文教の伝統と当時の青年の向学心がうかがわれる。

それらの青年夜学会の中で特筆すべき団体は、「佐川理学会」である。これは、佐川町出身の世界的植物学者^{まきのとみたろう}牧野富太郎が、青年時代に発足した団体である。明治22年(1889)の設立で、牧野富太郎が27歳のときである。牧野富太郎は、22歳で上京し、東京大学理学部植物学教室への出入りを特別に許され、

以後、東京と高知を度々行き来しながら、植物分類学の研究に打ち込んだ。このため、設立は上京 5 年後のときである。これも故郷への功績の一つである。

佐川理学会は、郷里の子どもたちの文化向上や科学教育の普及を図るため発足したもので、会員は数 10 人、牧野富太郎が会長となって植物採集会や研究活動などをおこなった。

ちなみに、青年夜学会の中の「佐川私立英学舎」も青年時代の牧野富太郎らが提唱して設立したもので、会員 100 人以上、内 30 人が女子会員であった。

こうした牧野富太郎の植物や郷里への熱い思いが、その影響を受けた人々に活動として引き継がれていく。

Ⅱ と き ぶん か こうじょうかい 土佐文化向上会

牧野富太郎博士を敬愛する水野 みすのすすむ 進氏が、昭和 20 年代から主宰した科学研究の勉学同好会である。

水野進氏は、大正 15 年（1926）佐川町に生まれた。役所勤務の傍ら、地元佐川の青少年のための研究会を立ち上げ、熱心にその世話をし、その間に縁を結んだ牧野博士の功績 こうせきけんしょう 顕彰を平成 26 年（2014）に高齢で亡くなるまで続けた。佐川における牧野博士の生き字引的な存在であった。

水野氏と牧野博士との縁は、水野氏が昭和 22 年（1947）に設立した「かわぶん か こうじょうかい 佐川文化向上会」の最高顧問を依頼したことに始まる。この会は、「これからの日本を担う青少年たちが、郷土が誇る偉人たちを手本として勉強に励み、文化の向上に努める」ことを理念としており、牧野博士が同じ趣旨で明治 22 年（1889）に創立した「さかわり がくかい 佐川理学会」（前記）の後身となるべく設立されたものである。

牧野博士が最高顧問となった翌年の昭和 25 年（1950）には「と き ぶん か こうじょうかい 土佐文化向上会」と名称を改め会の規模を大きくし、牧野賞、水野賞、深尾賞などの各賞を設置し、勤勉な青少年たちの表彰事業もおこなった。

また、牧野博士の生誕地記念碑の建設や、功績を紹介する「牧野先生資料展」などを各所で開催するなど、博士の功績顕彰事業を次々と実施した。

数 10 人の会員は毎月集合し、植物採集、化石採取、史蹟探求、読書会などを開いて研究を深めた。その他、機関誌の発行、会歌や牧野博士を讃える歌の制作などの活動を続けた。

そして、この「土佐文化向上会」の取組は、牧野博士への敬慕の情を同軸にしつつ、それにまちづくりの視点を加えて、現在の牧野公園での、ボランティア等の手による桜や牧野博士ゆかりの植物の植栽活動等に、その活動形態は違えども連綿と繋がっている。



牧野博士を訪問した土佐文化向上会の会員たち（個人蔵）

【前列左：牧野博士・前列中央：水野進氏】

コラム「^{さかわおうじゅかい}佐川桜樹会」

○ 大正3年（1914）、大正天皇即位の大典記念事業の一つとして、奥の土居（現牧野公園）を含む町内のいたるところに、ソメイヨシノの苗 1,300 本が植えられた。その折、将来の桜郷を夢に描き「佐川桜樹会」が結成されている。

※ 右の写真は、昭和初期に撮られた「佐川桜樹会」植樹の成果の一つ「^{ひとめ せんぼんざくら}一目千本桜」。



【和楽園から霧生関を望む】

Ⅲ 牧野公園ボランティア

現在、牧野公園では、老朽化した桜の更新をおこなうと共に、牧野博士にゆかりの山野草を植栽し、その再生に取り組んでいる。その主役が住民ボランティアである。

『みんなで育てる牧野公園』をキャッチフレーズに、牧野博士ゆかりの植物を中心に種子から育成・植栽し、みんなの力で牧野公園を作り上げていこうとしている。購入に頼らず佐川町周辺や公園内から採種し、佐川町民が育てた苗を植栽していくというのが、この取組の大きなポイントである。扱う山野草には、スズムシバナ、タニジャコウソウ、バイカオウレン、ユキワリイチゲといった植物のほか、絶滅危惧種なども含まれている。

主役は、「牧野公園はなもり C—LOVE」が母体となり、その中に「佐川びじんれん人連」「NPO 法人佐川くろがねの会」や「チーム田村^{たむら}」などの団体が所属するボランティアを中心とした人々である。毎週定例的に決めた作業日に集まり、楽しみながら作業をおこなっている。

また、子どもたちも含めてより多くの人に関われるようにと、年間 10 回前後のイベントも開催している。例えば、「中学校での種まき・鉢上げ講習会」「保育園児との植栽会」「みんなで育てた山野草の植栽会」「秋の山野草散策とアサギマダラ観察会」などである。

現在、これらの活動に携わっている人々は、約 350 人にのぼる。

こうした活動の成果として、牧野公園には、約 30 種の桜と 300 種を超える牧野博士ゆかりの山野草が生育している。多種の桜の植栽は、2 カ月間ほどの長い期間花見を楽しんでもらおうとの思いからである。



【山野草の植栽会 - 集合写真】

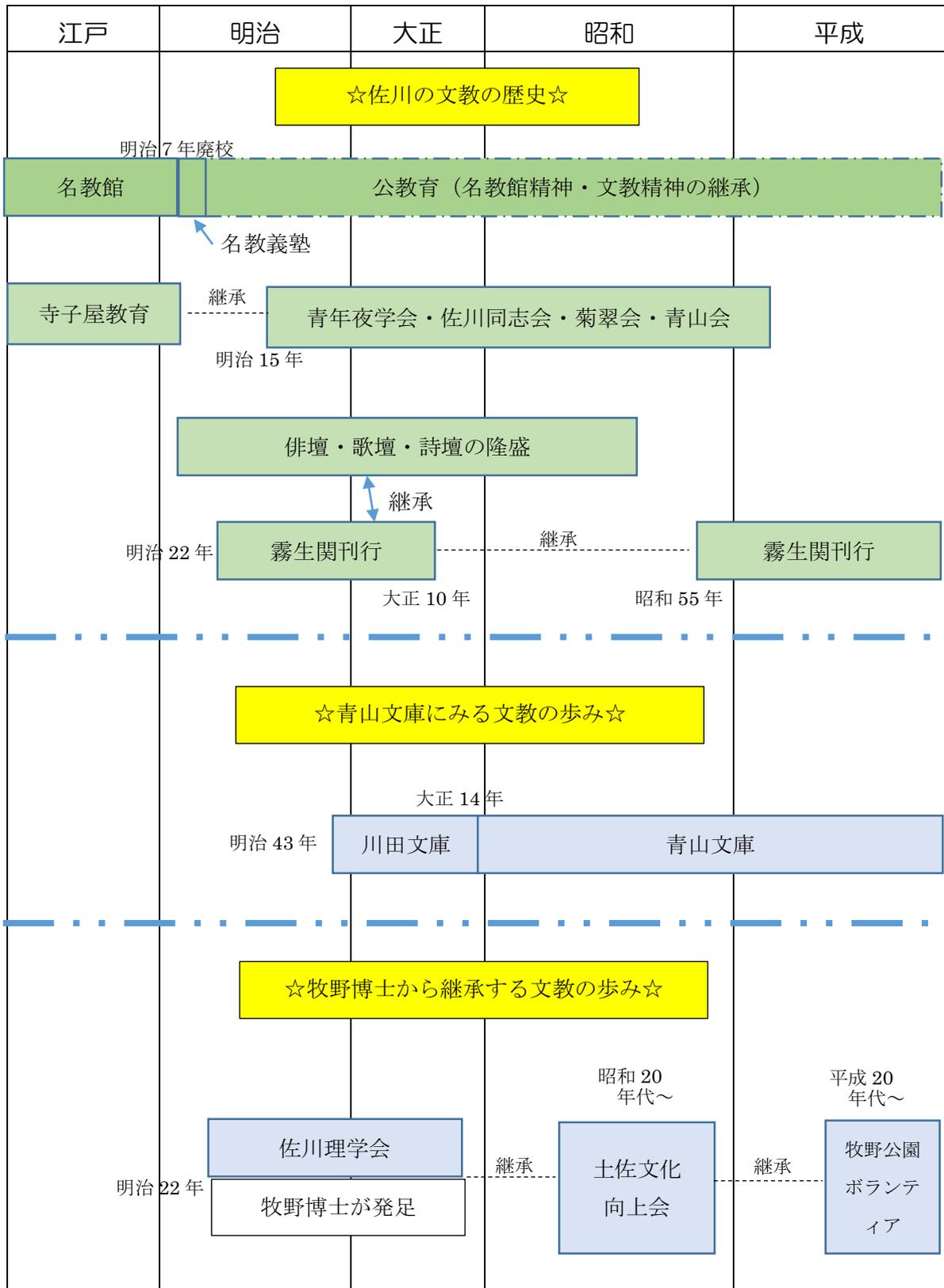


【上4枚：ボランティアの作業風景】



【上2枚：ちょっと休憩タイム】

図：文教の精神を継承する人々の活動の推移



(4) おわりに

佐川領主深尾家の文教施策が、名教館を中心の舞台として根付かせた文教精神は、時代を通じて継承されている。文教の活動は、ある時は「青山会」となって、ある時は「土佐文化向上会」となって、また、ある時は「霧生関刊行」として、バトンタッチされてきた。

これらの活動を1本の線で繋いでいるのが文教精神である。そして、この文教精神のバックボーンにあるのが名教館精神である。

それぞれの時代の各活動に関わった佐川の人々は、熱い思いと誇りを胸に、文教を次の世代へと継承してきた。そして、それが文教の歴史的風致を醸し出してきた。

これが現在の文教の町・佐川町である。



【文教が醸し出す歴史的風致エリア】

2. 「古城山」にみる歴史的風致

(1) はじめに

佐川の中心部に位置する上町地区の南側には、古城山と呼ばれる山がある。この古城山には、文字通りかつて山城(佐川城)が存在していた。

古城山の北面の一部にあたる位置に牧野公園がある。この牧野公園は佐川城郭の一部であり、追手口(城の表口)であった。現在は桜の名所として町内外から親しまれ、桜の季節には多くの観光客で賑わっている。町の中心部に高くそびえる古城山の一面が、限られた期間さくら色に塗りかえられる風景は、佐川ならではの風情を醸し出している。

牧野公園が桜の名所として知られ始めたのは明治35年(1902)頃であるが、「佐川の桜」の始まりは、文化・文政年間(1804~1831)だといわれている。牧野公園と並び、和楽園や春日川沿いの桜並木は桜の名所として知られており、その他にも「佐川のまち」ではいたるところで桜を目にすることができる。佐川の桜は長い年月を経て、「桜のまち」をつくりあげてきた。



【牧野公園を有する古城山】



【花見客で賑わう牧野公園】



【春日川沿いの桜並木】

佐川が輩出した偉人の一人である世界的植物学者^{まきのとみたろう}牧野富太郎博士は、古城山^{ふるもと}の麓の上町地区に生まれた。前述の牧野公園が桜の名所として知られ始めるきっかけとなった人物が牧野富太郎博士である。牧野富太郎博士は、青年期まで古城山をはじめとする近郷の山々をフィールドに植物採集を楽しんでいた。後に、「植物の父」として世界中から敬愛される植物学者となった。当然、佐川でも多くの人々から敬愛され、佐川の偉人の中でも、最も身近で、最も愛され続けている人物である。

このように、佐川町は古くから植物にゆかりがあり、その伝統は受け継がれ、現在も佐川町に根付いている。

(2) 歴史的建造物

① 佐川城跡^{さかわじょうせき}

「佐川城跡」は、桜の名所として有名な^{まきのこうえん}牧野公園を内包する古城山に位置する。戦国時代は、土佐を統一した^{ちょうそがへ}長宗我部家の筆頭重臣^{ひさたけ}久武^{きよぶ}氏の居城であった。関ヶ原の戦いを経て、徳川家康より命を受けた^{やま}山内一豊^{うちかつとよ}の新領地土佐への入国時に、その筆頭家老^{ふかお}職深尾^{いすみしげよし}和泉重良が大^お名格である佐川城付一万石を領地とすることになったことから、久武氏から城を明け渡され深尾の居城となった。

しかし、^{げん}元和元年(1615)の徳川幕府の^{いっこくいちじょうれい}一国一城令により、城郭、城壁、建造物などことごとく取り壊し、一部石垣のみが残ることとなり、まさにその名の通り古城山となった。



【佐川城跡 石垣】



【牧野公園内 竪堀跡】

佐川城は、古城山の地形を活かした南北に延びる山城で、城の本丸に当たる詰ノ段は堀切を隔てて南北に分かれている。標高 200.4m の本丸跡を示す標柱の建つ場所が詰ノ段（南）で、伝・櫓跡と地山の根石が残っている。詰ノ段（北）は、土塁と土塀基礎、東面下には唯一石垣が残っており、斜度 65 度で高さ 2.5 m、長さ 16.2m あり、北部隅角は算木積みで北端とし、石垣の石材はチャート（堆積岩）を主とした 5～8 段の野面積みである。

② 牧野公園

明治 35 年には牧野富太郎博士によりソメイヨシノの苗木が送られ、奥の土居（現牧野公園）に植樹されたのを契機に桜の名所となった。

昭和 31 年（1956）戦後荒廃した奥の土居を復活させようと、地元の人々による植樹活動が行われ、昭和 33 年（1958）に牧野公園と名付けられた。



【花見客で賑わう牧野公園】



【牧野公園】

③ わらくえん 和楽園

明治42年(1909)、当時の佐川郵便局長川田豊太郎かわだとよたろうが私有地を提供して和楽園がつくられた。和楽園には多くの桜が植えられ、奥の土居の桜とともに名所の一つとなった。

大正3年(1914)、帝国桜花会の調査する名所・名木に、県ならびに郡役所の報告によって、霧生関公園、奥の土居遊園地、和楽園を併せた佐川の桜が「日本桜譜」の中に列し、桜の名所として広く知られるようになった。

戦後、一度は荒廃してしまっただが、商工会を中心とした地元の人々によって植樹活動などが行われ、昭和30年代には牧野公園とともに再び桜の名所として復活した。



【和楽園】

④ 牧野博士の生誕地記念碑

牧野富太郎は佐川を代表する偉人であり、「日本植物学の父」として世界中から敬愛される存在である。牧野博士を顕彰する「土佐文化向上会」の活動の一環として、昭和27年4月(1952)博士の生誕地に記念碑が建設された。



【牧野博士の生誕地記念碑】

(3) 活動

① 桜のまち佐川を守る活動

佐川町は「桜のまち」として町内外から親しまれている。佐川町の桜の始まりは、深尾家臣で名教館教授としても仕えた岩神楽只仙いわがみらくしせんからといわれている。

文化・文政年間(1804～1831)、彼は自らの食しょくろく禄を割き報酬として人びとに与え、霧生園に桜を植えさせ、花の遊園地を作った。以後佐川は「桜のまち」となり、明治4年に書かれた「佐川土居図」では土居屋敷の周りに桜の木が数百本も植えられているのが確認できる。



【佐川土居図】

明治期、青源寺せいげんじ愚ぐ仲ちゆう和お尚しやうや牧野富太郎博士らによって奥の土居(現牧野公園)や和楽園は桜の名所となった。その後、大正初年には、大正天皇即位の大典記念事業の1つとして、町内のいたるところにソメイヨシノ1,300本を植樹し、将来の桜郷を夢に描いて「佐川桜樹会」さかわおうじゆかいを結成しその育成につとめた。この桜が見頃となった昭和10年代まで、桜は佐川の名物であったが、戦時中の食糧増産や樹齢老朽などにより、奥の土居(現牧野公園)



【佐川の夜桜】

や和楽園は荒廃してしまった。しかし、商工会を中心とした地元の人々によって、牧野公園や和楽園に桜の若木が植栽され、昭和30年代後半には、再び花見客でにぎわう「桜のまち」を取り戻した。

こうした住民の活動により、平成2年、牧野公園の桜は公益財団法人日本

さくらの会創立25周年記念として「日本桜の名所100選」に選ばれた。現在でも「桜のまち」佐川は健在であるが、桜（ソメイヨシノ）の寿命は50年といわれているため、牧野公園や和楽園では住民有志による植栽・手入れ等の活動が続けられている。毎年、花見の季節になれば商工会や観光関係者などが集まり、牧野公園、和楽園、春日川沿いにぼんぼりを設置し、住民主体でお花見を盛り上げている。また、牧野公園内には売店を開設し、軽食や地酒が販売され山全体が華やいだ雰囲気にも包まれる。平成26年からは、牧野公園リニューアル事業の一環としても住民と行政が一体となって「桜のまち」佐川を守り続けている。

佐川の桜には長い歴史があるが、これは、この地に住む人々が桜を町のシンボルとして大切に育ててきたからである。公園や川沿いなど、町内のいたる所で桜を目にすることができる。中でも、「日本の植物の父」牧野富太郎の名を冠した牧野公園は、自他ともに認める桜の名所であり、公園とその背景となる佐川城跡が一体となった古城山の風景は、風情ある風致を生み出している。



【賑わう夜の牧野公園】



【街中に飾られたぼんぼり】

② 牧野富太郎博士を顕彰する活動

牧野富太郎博士は、青年時代に佐川私立英学舎（明治19年）の設立に関わった。また、牧野富太郎博士は佐川理学会の会長となり、理科学の研究や植物採集会を行った。このように、牧野富太郎博士は研究者として邁進する一方で、故郷である佐川のための文化活動にも尽力した。研究活動のみならず、故郷愛を感じられる活動をした牧野富太郎博士は、現在でも町民から愛されており、博士の功績を称え、意思を継承する活動が続けられている。

水野進^{みずのすすむ}氏は牧野博士を敬愛し、佐川の青年のための研究会を立ち上げ、牧野博士の功績を称える活動をした生き字引的な存在であった。水野氏は昭和22年（1947）に「これからの日本を担う青少年たちが、郷土が誇る偉人たちを手本として勉強に励み、文化の向上に努める」ことを理念とする「佐川文化向上会」を設立した。昭和25年（1950年）には「土佐文化向上会」と名称を改め、勤勉な青少年たちの表彰事業や、博士の生誕地記念碑の建設などの功績顕彰事業を行ってきた。「土佐文化向上会」の活動は、佐川桜樹会や有志らによる桜の手入れや公園づくりに受け継がれ、現在は、牧野公園ボランティアに受け継がれている。牧野公園のボランティアは、故郷を愛した牧野博士の思いを継承し、桜や牧野博士ゆ



牧野博士を訪問した土佐文化向上会の会員たち（個人蔵）

【前列左：牧野博士・前列中央：水野進氏】



【牧野博士の生誕地記念碑】



【ボランティア作業の様】

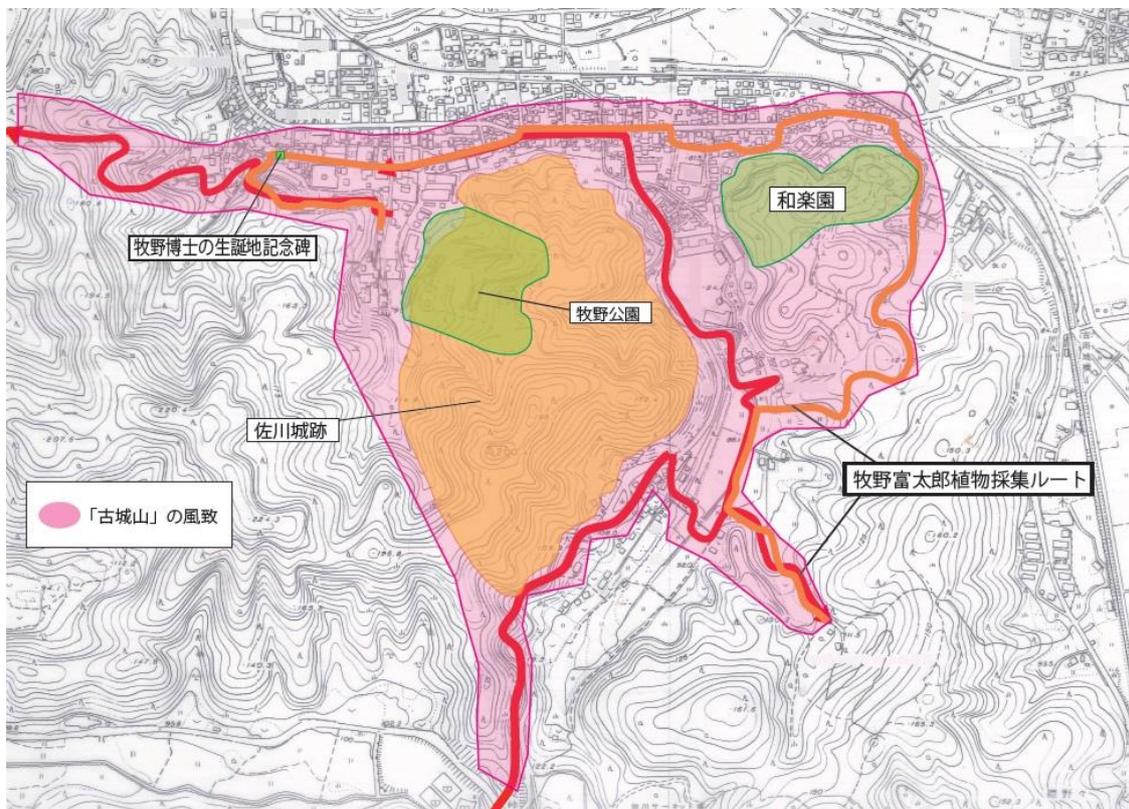
かりの植物の植栽活動などにより、地域全体で楽しむ「植物の聖地」をつくるべく活動を行っている。また、牧野富太郎博士が実際に植物採集をしたルートの散策会や、種まき・鉢上げ講習会などの活動も行っている。



【鉢上げ会の様子】

(4) まとめ

「桜のまち」は人びとによってつくられてきた。今も多くの人びとが桜を大切に、町のシンボルとして育てている。また、牧野博士の植物愛と故郷愛が形を変えながらも受け継がれ、「植物の聖地」をつくりあげる活動が行われている。町中に広がった桜と牧野富太郎博士の思いが一体となり、歴史的風致を形成している。



【古城山にみる歴史的風致エリア】

3. 「^{あきな}商い」にみる歴史的風致

(1) はじめに

佐川町の中心部にある^{うえまち}上町地区は、土佐藩筆頭家老深尾氏の城下町として栄え、主に商人が居を構えた「商人のまち」であった。その風情は現在も受け継がれ、伝統的な商家住宅や酒蔵などが町並みを形成している。

深尾氏は入国後国づくりを進め、土居を中心とした^{かくちゅうまち さむらいまち}郭中町（侍町）と^{ちょうにんまち}町人町を建設した。町人町上町（現在の^{うえまち}上町地区）には、東西約300mの道を造り、その両脇に宅地を構え、各地から有力商人を呼び寄せ、商業特権を与えた。呼び寄せられた商人は、織物、酒、^{こうじ}糶、大工、左官、鍛冶、染物などの多種多様な技術を持った職人であった。以後400年余り経過した現在では「酒造り」は佐川を代表する「^{あきな}商い」となっている。

「酒造り」が佐川で栄えた背景には、その自然条件の良さに負うところも大きい。佐川は山に囲まれた盆地であり、冬の寒さは酒造りに適している。また、町を仁淀川の支流が貫き、水は豊かである。酒造りの仕込み水は奥の^{おく とい}土居の湧き水で、本来酒造りに不向きと言われている軟水を使用し、^{ほうじゆん む び}芳醇無比と賞される独特の風味を創りあげている。

「^{あきな}商い」の文化が根付いた本町には、町内の商売繁盛を願い、長年執り行われている祭礼がある。この祭礼は「^{え び すじんじや}恵美須神社のおなばれ」と呼ばれ、神社で神事をおこなったあと、町内の商店街を行列が練り歩くものである。

佐川独自の「^{あきな}商い」の文化は、今も残る古い町並みや、長年続く活動と、それらを守る人々によって受け継がれている。

(2) 歴史的建造物

① ^{つかさ ぼたんさかぐらくん}司牡丹酒蔵群

佐川町にある造り酒屋は^{つかさ ぼたん}司牡丹酒造株式会社である。司牡丹は大正7年、当時佐川にあった酒屋3軒4銘柄（^{くろがね や}黒金屋・^{あらがね や}笹の露 | ^{くろ}生金屋・^{くろ}野菊 | ^{くろ}黒金屋出店・若柳、日の本）が合併し、佐川醸造（千歳鯛）を設立したことに始まり、^{た なかみつあき}田中光顕が名付けた銘酒「司



【司牡丹1号蔵】

牡丹」を販売、昭和7年に酒銘を社名とし司牡丹酒造株式会社となった。

司牡丹酒蔵群の中で歴史的建造物として代表的なものが1号蔵である。1号蔵は約170年前（江戸末期）に造られ、長さは85メートルと長大で偉容を誇り、空高く伸びた煙突からは酒米を蒸す際に生じる蒸気がたなびき、酒蔵ならではの風情を醸し出している。

この蔵が造られた経緯には、歴史的由緒がある。江戸時代中期より酒造業を営む家系である竹村本家は、町人でありながら豪商であったことから、御目見おめみえ町人ちやうにんとして名字帯刀を許され、加えて幕府巡見使宿ばくふしゆんけんしやどを務める家格であった。

当時佐川では、巡見使の視察に備えて、目に付く建物や塀、橋などの改築・改修を行う風習があった。このため竹村本家は、天保9年（1838）の巡見使の視察に備えて、本家の客間を改築し、酒蔵を建設した。これが、1号蔵が造られたいわれである。竹村家の文書によると、1号蔵は同年に建築されている。しかし、焼酎



【司牡丹焼酎蔵】

蔵やその他一部の蔵の建築年代については、明治以前のものであるが、それ以上のこと明らかではない。（「高知県の近代化遺産」より）

② ほてい

もとは、浜口家の酒造工場の一部で「野菊」という銘柄の酒を製造していた。その後、司牡丹酒造株式会社の工場に合併され、戦後から昭和53年（1978）頃まで、その一部は料亭として営業されていた。一般客用ではなく、文人墨客ぶんしんぼくきやくの集う司牡丹酒造の社交クラブのようなものであり、酒



【ほてい】

文化の発信基地的要素が強かった。平成8年（1996）、往時の酒文化を現代

的に復活させようと、酒ギャラリー「ほてい」として改装され現在に至っている。

③ 竹村家住宅

竹村家は寛文年間（1661～1673）に高岡村（現土佐市）より初代竹村務平が来住、享保年間（1716～1736）より酒甫手（酒造権）を借り受け酒造業を開始した家系で、寛保元年（1741）に酒甫手を得て名実共に酒造家として独立した。その後、深尾氏に謁見



【竹村家住宅】

が許される御目見町人、さらに名字帯刀も許され、明和7年（1770）に「黒金屋」の屋号を深尾家より賜る。

建築年代に関する直接的な史料は見つかっていないが、建築的特徴や竹村家文書などから、店舗部が安永9年（1780）、主屋・座敷部は天保9年（1838）であると推測される。

④ 旧浜口家住宅

浜口家住宅は明治時代初期に建築されたものと推測される。それは母屋座敷の違い棚に深尾家の家紋である「梅鉢紋」の金具が使用されており、明治2年（1869）に取り壊された深尾土居屋敷の書院が移築されたものであると伝えられている。



【旧浜口家住宅】

浜口家の出自は、天正の頃、長宗我部家の家臣であったが、江戸時代後期に須崎より佐川に来て酒造業「生金屋」を営んだ家系で、「野菊」なる銘柄の酒を醸造販売した。

大正7年（1918）、黒金屋、黒金屋出店、浜口酒造の3軒が合併して佐川醸造株式会社（司牡丹酒造株式会社の前身）となった。

⑤ ^{きゅうたけむら こふくてん} 旧 竹村呉服店

現存する店舗と主屋は木造2階建である。建築年代を直接示す史料はみつからないが、店舗は天保元年（1830）頃、主屋は安永9年（1780）頃に建てられ、当初は別棟だった蔵が後に改修で一体化したとみられる。



【旧竹村呉服店】

店舗の外壁は海鼠壁^{なまこかべ}で、蔵の部分は格子柄を斜めに配した四半張りとし、アクセントをつけている。主屋の1階は長押を回さず地味な設えだが、2階は華やかな仕様の欄間などがある。

土蔵は明治時代中頃の木造2階建てで、東・南面は漆喰壁、西・北面は一部板張りである。

国指定の重要文化財「竹村家住宅」の西隣に位置するこの町家は、竹村本家から安永6年（1777）に分家した家系で、代々安右衛門を襲名した。当初は質屋を営み、のちに呉服商及び雑貨商へと発展し、屋号を㊦（まるきゅう）と称した。

⑥ ^{たけむら け と ぞう} 竹村家土蔵

竹村家土蔵は国の登録有形文化財である。木造2階建の瓦葺^{かわらぶき}で、3段の水切り瓦と、土佐漆喰^{とさしつくい}の白壁と緑色に映える銅板の窓が2段ある。基礎の石垣はチャートの亀甲積みで中央部を膨らませた大石が使用されている。



【竹村家土蔵】

建築年代を示す資料はないが、関連する資料や材質から明治中頃の建築と推定されている。

⑦ ^{えびすじんじゃ} 恵美須神社

恵美須神社はもともと、土居下町町人町の商業神で、東町・西町の崇敬神であった。現在は佐川町全体の商業神として町内安全、商売繁盛の崇敬神となっている。

伝来の棟札によると、文久元年（1861）に深尾 11 代当主^{しげなる}重愛の寄進によって再建されたことが確認できる。再建当時は古市町^{ふるいちまち}（佐川町甲 1629 番地）に鎮座していた。

昭和 25 年（1950）前述の場所より現青山文庫駐車場北側に移転した。その後、昭和 47 年（1972）には牧野公園の中腹に再移転し現在に至っている。このとき、稲荷神社も^{ごうし}合祀され、参道には多くの赤鳥居が並んでいる。



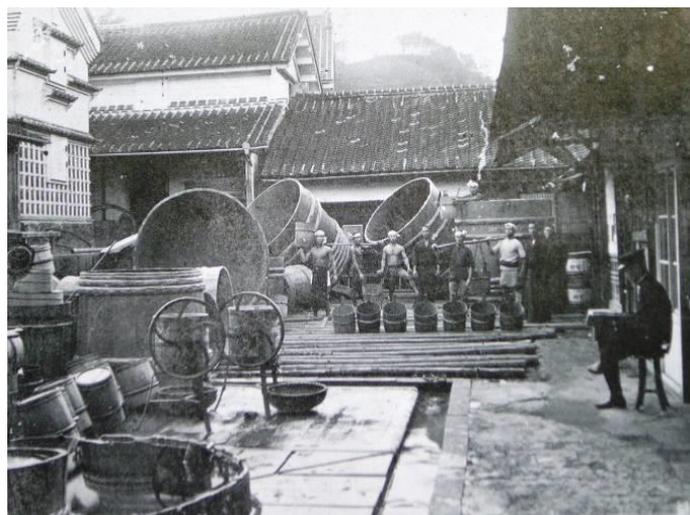
【恵美須神社】

(3) 活動

① 酒造りと伝統文化

酒造りの歴史は「酒文化」を生む。酒文化は伝統として後世に継承される。

新酒ができあがると酒蔵の軒先には杉の葉を束ねて丸く刈上げた「酒林」^{さかばやし}が吊るされる。青々としたそれは「今年も新酒ができました」という酒蔵から



【昭和初期の酒造風景】

近所の人びとへのお知らせで、現在でも司牡丹酒造株式会社の軒先に吊るされている。杉の葉を大量に使い蔵人が手作りするその姿は伝統を感じさせ、季節を経て葉が枯れ茶色になる様は、新酒が醸成され芳醇な味わいへと変化することを想起させる。現在でも多くの酒造会社で、酒蔵のシンボルとして吊るされているが、佐川の酒蔵では伝統を守り、蔵人が手作りで毎年架け替えることを続けている。



【酒林】

造り酒屋の正月ともいえる蔵入りは、酒造りが始まる10月に行われ、杜氏^{とうじ}、蔵人や従業員が厳かに「和醸^{わじょうりょうしゅ}良酒」を祈願して神事を行う。これは古くから伝わる恒例行事である。また、酒蔵にはそこかしこに神棚があるが、これは、酒造りの最高責任者である杜氏が、失敗が許されない重圧と緊張感の中、自然と神棚に手を合わせることが多くなるからではないかと伝えられている。



【蔵入りの神事】

酒造りの工程は、蒸し、製麹^{せいきく}、酒母造り、もろみ、上槽^{じょうそう}等であり、基本的に昔も今も変わらない。酒造りの伝統は時代を経ても脈々と受け継がれている。

酒造りの要的存在といえは杜氏^{とうじ}である。杜氏は、10月頃から翌年の5月頃まで蔵元に滞在し、蔵人とともに仕込みを行う。原料の吟味や醗酵状態の判断などには熟練した勘がものをいい、その技は酒の味を左右する。

佐川の酒の味は、広島杜氏がつくったともいえる。軟水でいい酒を造るなら広島杜氏と、司牡丹の中興の祖・竹村源十郎が見込んで以来、歴代の広島杜氏たちが酒造りに携わってきた。

昔ながらの「こしき」と呼ばれるせいろのような桶で蒸す酒米の蒸し具合。酒造りで最も重要で難しいと言われる麴造り。

「初添え」「踊り」「中添え」「留添え」と呼ばれる作業段階を4日間かけて行う「もろみ仕込み」。熟成したもろみを布の袋に詰めて「槽^{ふね}」という昔ながらの压榨機にかけて芳醇な香りを放つ酒を搾り出す「しぼり」など。これらの作業工程を、杜氏や蔵人が愛情と丹精を込めて昼夜つきっきりで行う。

このように杜氏や蔵人の経験や技術等に支えられてきた酒造りの伝統は、時代が変わろうとも今に生き続けている。

また、技法のみならず、酒造りに使用する道具にも伝統が受け継がれている。例えば、貯蔵タンクはステンレス製や樹脂素材を使用したものなど、製造の合理化のために新たな素材のタンクが開発されているが、司牡丹酒造ではホーロー製のタンクを



【蒸し】



【麴切り返し】



【盛り（麴蓋）】



【もろみ仕込み】



【槽（ふね）】



【しぼり】

使用している。タンクによる味の違いは、職人にしかわからないほどの僅かな違いであるそうだが、司牡丹酒造ではその僅かな違いにまで気を配り、酒造りを行っている。

今では、造り酒屋は司牡丹酒造のみであるが、「酒造り」は誰もが認める佐川の文化として地域に染みこんでいる。創業 400 年や設立 100 年の際には、イベントや振る舞い酒を行うなど、「酒造り」は地元住民にとって最も身近な伝統文化であるとも言える。



【昭和38年製造のタンク】

② えびすじんじや 恵美須神社の祭礼

恵美須神社は佐川町全体の商業神として、商工会員の安全、商売繁盛の崇敬神となっている。毎年1月10日には、佐川町の商工業の発展を祈願して恵美須神社の大祭が行われている。この大祭では、恵美須神社で神事を行った後、法螺貝や神輿を先頭に、町内の商店街を西から東へ練り歩く。



【神事】

この大祭は、佐川町商工会が中心となり執り行われている。佐川町商工会は昭和35年（1960）に法人設立登記されているが、その前身団体は明治の年代から存在していた。商工会に残る覚書（明治31年（1898）12月）によると「新市町を東より西へ松崎・肥代ノ坂と行き、肥代ノ坂より西谷へ行き、西谷より上町へ出（岸屋家の辻より東へ行く）東町は上廻り結城（宅）迄行き広小路より新丁へ下り、以下順番にて廻すべきこと」とあり、当時の練り歩きの巡行ルートが示されている。このルートは、神社の移転や商店街の発展に伴い、徐々に範囲を広げた。現在は、商店街の西端にあたる店舗（現ホームセンター佐川）を出発し、商店街（県道302号長者佐川線）を東方向へ練り歩く。途

中県道 296 号を通り、西佐川駅を經由して再び県道 302 号へ戻る。その後、役場を經由し、司牡丹酒造 1 号蔵を右手にさらに東へと進む。商店街の東端（春日踏切）まで行ったところで折り返し上町地区に入る。上町地区では、深尾氏が創りあげた「商人のまち」を東から西へ進む。この通りは、本町で最も古い町並みが残っているエリアであり、順に、竹村家住宅（重要文化財）、竹村家土蔵（登録有形文化財）、旧竹村呉服店（登録有形文化財）、司牡丹焼酎蔵、ほてい（町指定文化財）、旧浜口家住宅（登録有形文化財）の前を練り歩き、恵美須神社へと戻る。

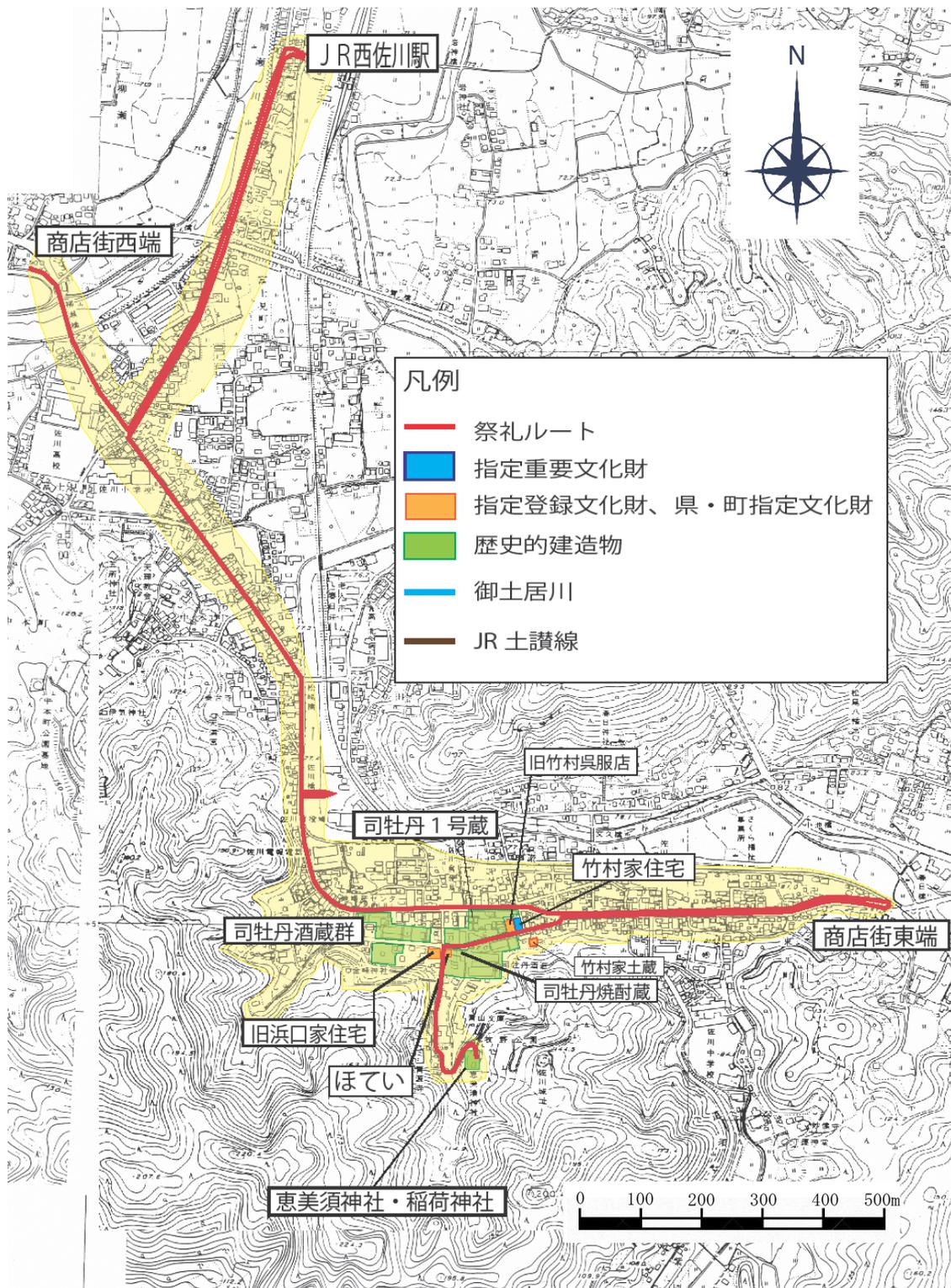


【恵美須神社の祭礼】

（４）まとめ

深尾氏が創りあげた「商い」の文化には、400 年の歴史があり、藩政期から「佐川のまち」の形成に大きな役割を果たした。歴史的建造物は、現在もかつての風景を創り出し、伝統を残した酒造りは歴史を感じさせ、ほのかに薫る酒の香りとともに、「佐川のまち」に染みついている。また「商い」に対する地域の想いは、商売繁盛を願うお祭りとして現代まで受け継がれている。

これらが重なり合うことで、「商人のまち」は創りあげられ、佐川独自の歴史的風致を形成している。



【商いにみる歴史的風致エリア】

4. 「民俗芸能」にみる歴史的風致

(1) はじめに

^{さかわちちょう}佐川町の各地区に、古くは中世の頃から現在に伝わる民俗芸能がある。

これらは豊かな「踊り文化」として、それぞれ民俗芸能が伝わる地域の人々によって継承され、神社における大祭での奉納など、本来の場での披露から町行事等への出演まで幅広い活動を展開している。

(2) ^{すいおう ほんおどり}瑞応の盆踊

① ^{すいおう しあと}瑞応寺跡（町指定史跡）

瑞応寺の由来は、『^{さかわちちょう}佐川町史』によると、戦国時代、この地に威勢をはる^{かたおかしげみつ}片岡茂光に新興の^{ちようそ が へくにちか もとちか}長宗我部国親（元親の父）が政略結婚により妹（後の^り理春尼）を嫁がしたことに端を発する。永禄3年（1560）夫茂光、兄国親が相次いで没したので、茂光の妻は、庄田地区の^{まんぶくじ}満福寺を中野地区の西方に移し、兄国親の法名「^{すいおうかくせい}瑞応覚世」からとって「瑞応寺」と名付け、自身も「理春尼」と称し、菩提を弔った。

『^{と さしゅうぐんし}土佐州郡志』によると、近世に入ってから、観音堂のみ残ったと伝わり、現存する棟札から、文化14年（1817）再建、天保2年（1831）再建とたびたび再建された事が確認できる。現在の建物は棟札から昭和25年（1950）に再建されたものであることが確認できる。



【瑞応寺跡】



【観音堂】

② 瑞応の盆踊の由来

黒岩地区の瑞応に伝承されている盆踊で、高知県の無形民俗文化財に指定されている。盆は、身近な新仏の供養を核として先祖供養など死者の魂に対する慰霊の機会であった。

本来、旧深尾領内で行われたもので、豊年を祝って、豊穰の感謝を神に捧げ奉納するために踊ったとも言われている。

踊りの起源は、『佐川町史』によると、諸説あり、中世の文明年間（1480年前後）高北守護代中山信康が、柳瀬川流域の開田後、豊穰を願い領民を集めて踊らせたとも、また戦国時代の高北支配者片岡茂光が育成した踊りであるとも伝えられ、茂光の妻理春尼は亡き夫の菩提寺として瑞応寺を開基して、毎年の盆踊供養としてこの踊りを行っていたともいう。



【瑞応寺跡境内で奉納される「瑞応の盆踊」】

③ 瑞応の盆踊の構成

以前は旧暦7月16日に踊られていたが、昭和62年（1987）に新暦8月16日に変更された。黒岩地区瑞応の真言宗瑞応寺跡境内で奉納される。

踊り場の中央に花台と称する櫓を据え、屋根に紙花、提灯を飾り、歌い手が太鼓の音に合わせて踊る右回りの手踊りであり、古来からの手踊りだけの盆踊を今に伝えている。

踊り歌の「コリヤセ」「万才」「サリトテ」は、七七七五調の江戸期以降の流行歌。「千本」「絵島」は七五調の口説き節で、古くから一定の歌詞が伝えら



【花台（櫓）】

れていて、それに従って歌われる。1節歌うともう1人の音頭取りが次の1節を歌い、2人が交互に歌っていく。「千本」には南無阿弥陀仏^{なむあみだぶつ}の転訛した囃子^{てんか}が挿される^{はやし}。

盆踊が近づく日曜日、地区民総出で櫓（花台）等を飾る紙花づくりを行う。

本番前日には、高さ3メートル、1辺1メートル、20センチ四方の花台を組み立て、屋根には400本程度の花を飾り付ける。本番には、花台の上に歌い手が3人ないし4人上がる。

当日は午後6時から祭典が始まり、午後7時より太鼓の呼びの音で村の踊り子が集まり始める。「コリヤセ」「千本」「絵島」「万才」「サリトテ」と5通りの踊りで、これを繰り返して踊る。



【紙花を飾った門】

④ 瑞応の盆踊の継承

過疎による担い手の高齢化が進む中、昭和37年（1962）に瑞応の盆踊の由来を確認し無形民俗文化財として後世に伝承していくことを目的として「佐川町瑞応盆踊保存会」を発足。

平成28年（2016）には「瑞応の盆踊450年祭」を開催し、記念碑の建立や記念タオル、記念法被の作成を行い、瑞応の盆踊を広く周知させ、後継者のPRに努め、また踊りによる他地域との交流も積極的に行うなど盆踊の継承にも努めている。



【「瑞応の盆踊り450年祭」記念碑】

(3) ^{しらくらじんじやはなとりおどり}白倉神社花取踊

① 白倉神社

白倉神社は、佐川町^{とがの}斗賀野地区、^{こくぞうさん}虚空蔵山（674.7m）の北麓に位置する。

斗賀野地区（旧斗賀野村）の総氏神で、祭神は^{れいぜい}冷泉天皇。「斗賀野一の宮」と称されている。

白倉神社は明治維新まで別当寺として^{じんぐうじ}神宮寺に管理された斗賀野郷第一の総鎮守であり『佐川町の文化財（前田和男著）』によると、白倉神社に現存する棟札の中

で最古のものは「^{ぶんき}文亀元年（1501）^{しらくらだいみょうじんいちろうさいこうじこじゅう}白倉大明神一宇再興氏子中」とあるため、1501年には白倉神社が創建されていたことが確認できる。白倉神社には、昭和46年（1971）までの棟札が計33枚現存しているが、中でも江戸時代の棟札には、歴代の佐川領主や幕末期の土佐藩主らの名前が散見する。本宮は棟札から昭和2年（1927）に再建されたものであることが確認できる。



【白倉神社の本宮】

② ^{みつぎ}美都岐神社

勧請の沿革など詳しいことはわからないが、祭神は^{えんゆう}円融天皇で、「斗賀野二の宮」と称されている。『佐川町の文化財（前田和男著）』によると、美都岐神社に現存する棟札の中で最古のものは「^{えんぼう}（表）延宝7年（1679）^{ふかお}奉造立美都岐神社 佐川領主深尾^{いなばのかみしげてる}因幡守重照（裏）氏子安全五穀成就」とあり、1679年には美都岐神社が創建されていたことが確認できる。



【美都岐神社】

現存する棟札には、白倉神社と同様に、歴代の佐川領主や幕末期の土佐藩主の名前が散見される。現在の建物は棟札から昭和30年（1955）に再建されたものであることが確認できる。

『わが町の文化財と旧跡』によると両社を氏神とする芝ノ坊や美都岐地区にはミコクデン（御穀田）の字名（ほのぎ）があり、明治維新後に神社名の固定するまで美都岐神社は、貢、御備、三次、美都岐などの文字が当てられている。

③ 白倉神社花取踊の由来

白倉花取踊の由来は『わが町の文化財と旧跡』によると、古来より、斗賀野地区の氏神であった白倉神社と美都岐神社、川ノ内の氏神であった白王神社、舟床の神明神社の祭礼で奉納された踊りで、白倉、美都岐両社では現在も行われており、町の無形民俗文化財に指定されている。



【明治30年3月14日 白倉神社祭礼絵馬】

白倉神社花取踊は、戦国時代に、土佐七守護の一人であった津野氏の一族で、須崎市付近を本拠地とした堅田治部左衛門の次男掃部亮が、元禄年間に斗賀野の川ノ内に移り住み、片田氏を名乗り、同地の開拓に従事し、氏神の白王神社にこの踊りを奉納したことに始まると言われている。後にこの踊りが一の宮白倉神社と二の宮美都岐神社に奉納されるようになったもので、戦前までは川ノ内の片田本家により執り行われ、音頭頭も片田氏であった。

明治30年3月14日の例祭の絵馬が白倉神社に奉納されており、その頃の祭りのにぎやかな様子が描かれている。

もともとは、中世末に津野領に伝わった踊りで鳥毛を冠るところにこの踊りの特徴がある。そして、袴よりも趣のある裁付袴を着用する。



たっつけばかま
【裁付袴】

この踊りは基本的に念仏の詠唱と室町小歌から成る風流系の「念仏・小歌踊り」であると認識されている。「花取」とは神仏に供える花、シキミ、サカキ、ツツジ、シャクナゲ等を山から取ってくるという意味で、その背景には「春山入り」と呼ばれた古来の民俗が関係していると言われている。

④ 白倉神社花取踊の構成

毎年11月12日の例祭に斗賀野一の宮白倉神社と二の宮美都岐神社に奉納される。白倉神社花取踊の演目は、冒頭に入場の歌として「太刀かまのて」（通常は「入りは」と称される）で始まり、仕舞に退場の歌として、「松風」（通常は「引きは」と称される）で終わる典型的な「風流踊」の形式で、「ここあけよ」、「ひ



【「白倉神社花取踊」の奉納舞】

け引木」というそれぞれの冒頭の一句に、入退場の踊り歌としての機能が託されている。（現在、踊り歌は使われていない）

踊りの衣装は木綿着物に裁付袴、白襷を後ろへ長く垂らし、手甲脚絆に白足袋、わらじ履きの武者姿に、山鳥の尾羽の垂れた花笠をかぶり、真剣と木の薙刀の柄に紙シデをつけた二つの隊列が向かい合う。真剣とシデ薙刀を振りかざして2列相対して踊る。足の所作は「ねぶた」と称され、3歩歩いた後、静止するのではなく足を交差させる。

くるま

花取りは、7日精進ぞ 花取り落とすな、
 せんごぜんやあ、やんごぜは、
 どこのせんごぜん、御荘緑 せんごぜん、
 いざさらば、かみへまみやう、
 みにあしあひのないまにんや、
 和女ゆかば おれもまいろう
 野の末、山の奥までも、



【祭り当日の流鏝馬の様子】

だたのやばけらしみもせで 引くひとの、
いよそでを引くに引かれぬ、
こちよのゆみいよ はじよう トン
(口承・口伝のため、意味不明のところが多い)

出典：『わが町の文化財と旧跡』

この踊り歌の歌詞には、「花取りは、7日の精進」とあるように、神事であった事をうかがわせる。

戦後、一時休止したこともあったが、郷土伝統の民俗芸能を惜しむ古老や青年団によって再開された。現在は、白倉神社大祭の日に、総代や頭屋によって神事が執り行われ、保育園児が斗賀野中央保育園から白倉神社まで自分たちで作った神輿みこしを担ぎながら練り歩き、「斗賀野花取踊保存会」が白倉神社花取踊を奉納し、続いて美都岐神社でも踊りの奉納が行われるなど、地域の祭りとして定着している。



【神輿を担ぐ地元の保育園児】

⑤ 白倉神社花取踊の継承

戦前まで、踊り手の確保は地区の責任であり、各地区で選ばれる2人の青年は、「3年間は踊る」として、自身が踊れないときは代役を構え、米一斗の代償を供したという。

また、踊り自体は、伝統として先輩が後輩に厳しく教えて継承していたが、昭和32年(1957)に「斗賀野花取踊保存会」が発足され、現在では、小学生から壮年までが地域の祭



【白倉花取踊に参加する小中学生】

りとして楽しみながら、白倉神社花取踊の継承に取り組んでいる。

(4) 土佐の太刀踊 (佐川町 太刀踊)

① 仁井田神社

仁井田神社の祭神は稲倉魂^{うかのみたまの}命^{みこと}で、古来、四ツ白地区の総鎮守神として尊崇されてきた。四ツ白は、戦国時代は庄田村の一部であった。江戸時代に入り庄田村が佐川領主、深尾家の領地になったのに対し、四ツ白は二ツ野と中野^{なかの}とともに庄田村から分離し、土佐藩領の黒岩郷の枝郷となった。



【仁井田神社】

長宗我部時代には庄田村（現在の佐川町黒岩地区庄田）に属した。太刀踊の舞台となる「仁井田神社」の由来は、社伝によると貞享5年（1688）9月に勧請とあり、『佐川町の文化財（前田和男著）』によると、仁井田神社に現存する棟札の中で最古のものは「貞享5年（1688）干時 本願 念仏本願」とあるため、1688年には仁井田神社が創建されていたことが確認できる。棟札の文字「念仏本願」「右念仏者建立」から時宗系の神仏混淆の証がうかがわれる。

現在の建物は昭和45年（1970）の台風により四ツ白集落に鎮座する仁井田神社外十社が大被害を受け、集落の総意により仁井田神社拝殿を大改築し各神社を合祀したものであることが棟札から確認できる。鳥居は3基あり、一番手前の鳥居には「奉昭和15年 神社総代」と刻まれており70年以上を経ていることがわかる。



【仁井田神社の鳥居】

② 土佐の太刀踊(佐川町太刀踊)の由来

「土佐の太刀踊」は黒岩地区四ツ白に伝わる風流系ふうりゅうの太刀踊である。高知県の無形民俗文化財に指定されている。

由来は『佐川町史』によると、仁井田神社が鎮座する四ツ白は、戦国時代の黒岩郷領主片岡氏の家臣7人が入って開拓したと伝えられている。この地区にあった念仏踊しろうきょうを貞享5年(1688)、仁井田神社本殿再建の際、奉納したことに始まると伝えられている。

「太刀踊」は「花取踊」が変化、移行したもので、「花取踊」の採り物の特徴である長柄ながえの薙刀式なぎなたしきの太刀に変わって通常の刀が用いられるようになったものである。この変化に伴い、踊り歌も歌舞伎風の「忠臣蔵」など新しい近世歌謡が取り込まれるようになるが、一方で、古い「花取踊」の歌謡も継承している。

明治40年(1907)までは「黒岩村流し踊り」としていたが、明治40年東宮殿下とうくうでんか(後の大正天皇)御覧の折、谷干城たにだてきが「武士踊り」と改称。以来、続けられてきたが、第2次大戦の混乱でしばらく休止していたものを、昭和24年(1949)、地区の青年有志が中心となり先輩の指導を受けて再開した。

昭和27年(1952)、県指定無形民俗文化財に指定されるに及んで「佐川町太刀踊さかわちょうた ちおどり」と称するようになった。



【「四ツ白太刀踊り」神事の様子】



【仁井田神社境内での「太刀踊り」奉納舞】

③ 土佐の太刀踊(佐川町太刀踊)の構成

11月3日、黒岩地区四ツ白仁井田神社秋の例祭に毎年奉納される。踊りの衣装は、黒の袴はかまに白襷たすきを長く背に垂らした剣士姿に、白鉢巻てっこうに手甲を着け、

踊り手が 2 列に相對して 1 組となって踊る。^{かね}鉦と太鼓とは先頭にあつて相對し、音頭の鉦と歌声に合わせて数組が踊る。音頭は列外に位置する。1 列は太刀、1 列は竹の両端に紙飾りをしたシデ棒を手に踊る。相手の持った紙シデを真劍で切り、紙吹雪を飛散させるという目立った演技を見せる。

元來の演目は、「入れは」から「引きや（は）」まで 11 演目あるが、現在は「しのぎ」「忠臣蔵」「鎌倉」「引きや（は）」の 4 演目を奉納している。

「引きや（は）」

よう、なむあみだ、みいだ。松よ風よと落す夜もそろ。

下ちさんあんの山のツツジの枝がや二枝、一枝は釈迦土産、
又一枝はや身のため。

茶を摘ば寺の茶を摘め、小僧にひかせてざざめく引けば、
引木まはせ、小茶臼、ばんばがおろす小葉の茶。

あれを見よや、川の瀬を見よ、早瀬に小砂がたまらん。

止歌、こちやころべや、ころところべよ、お米が肩がやあ痛
や。

（口承・口伝のため、意味不明のところが多い）

出典：「わが町の文化財と旧跡」



【シデ】

この踊り歌の歌詞には、ツツジを取ってくる^とあり、この点からも、太刀踊の前身である花取踊のこん跡が見られる。

④ 土佐の太刀踊（佐川町太刀踊）の継承

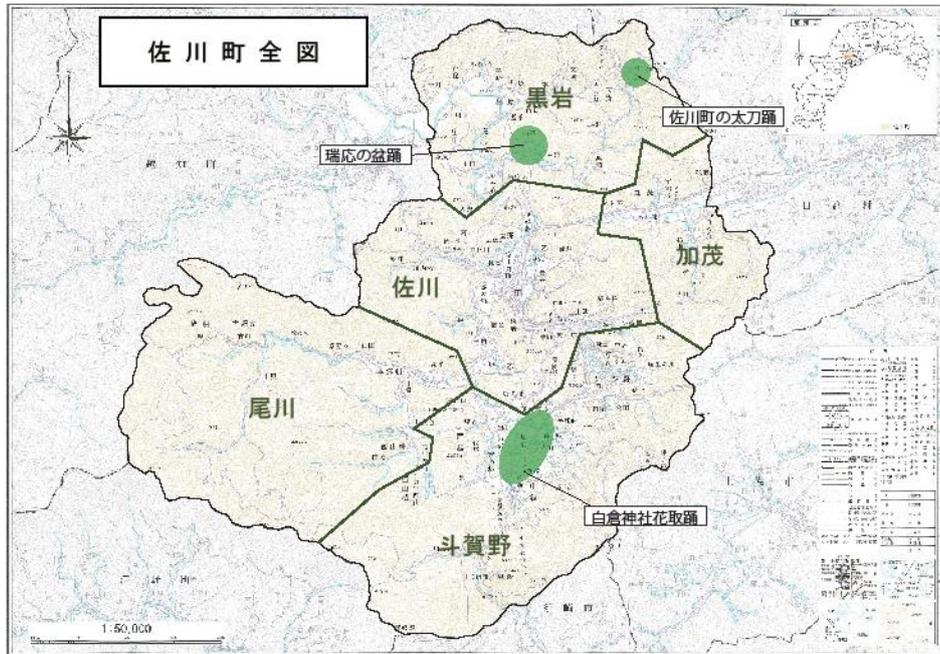
昭和 40 年に県保護無形民俗文化財に指定されたことを契機に、「四ツ白太刀踊会^{たちおどりかい}」を結成し、小学生から高校生までの指導を行い、地域の敬老会など様々な行事で披露するなど次世代への伝統文化の継承を図っている。



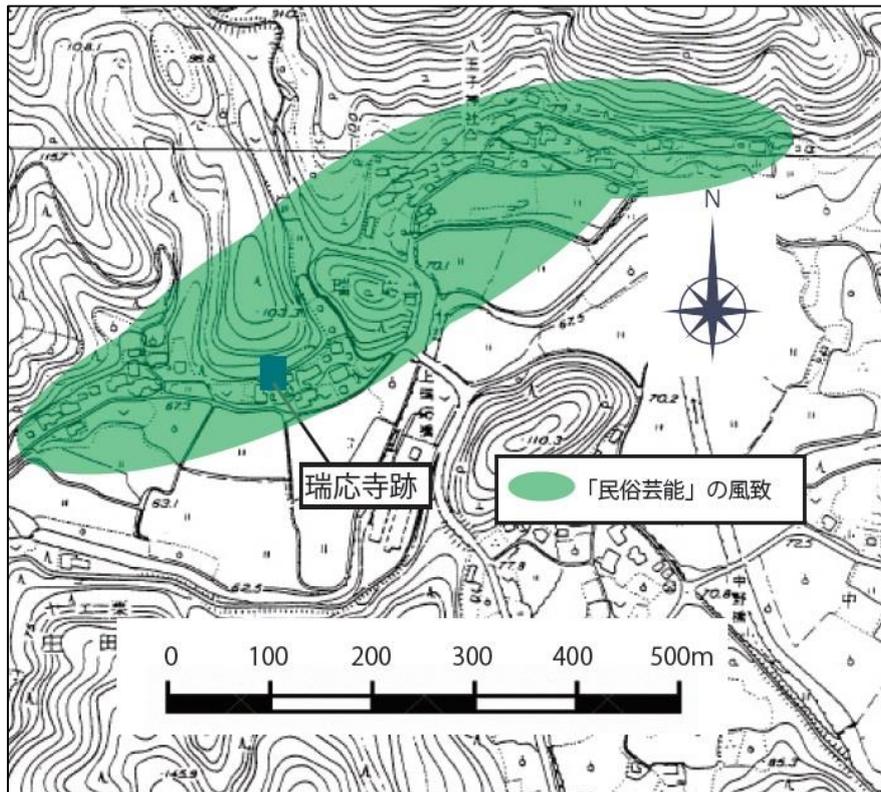
【四ツ白太刀踊の練習風景】

(5) まとめ

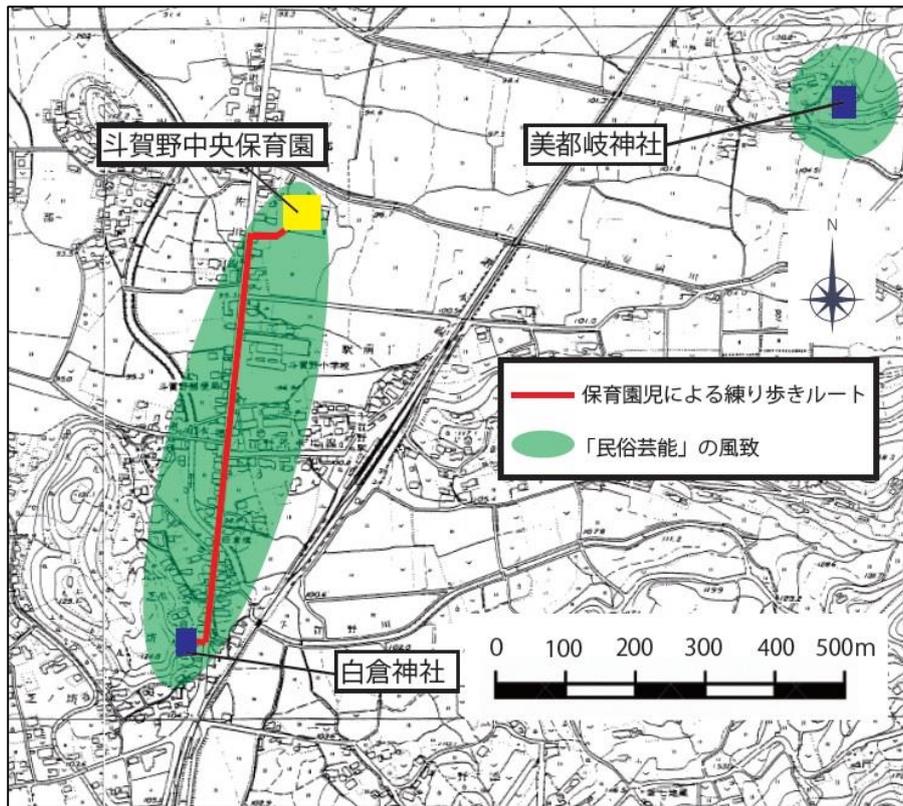
地域固有の歴史及び伝統を反映した民俗芸能の活動、地域の人々たちの努力により大切に受け継がれてきた豊かな「踊りの文化」、「風景」「地域の人々」。これらが一体となって織りなす良好な環境が風情ある風致を形成している。



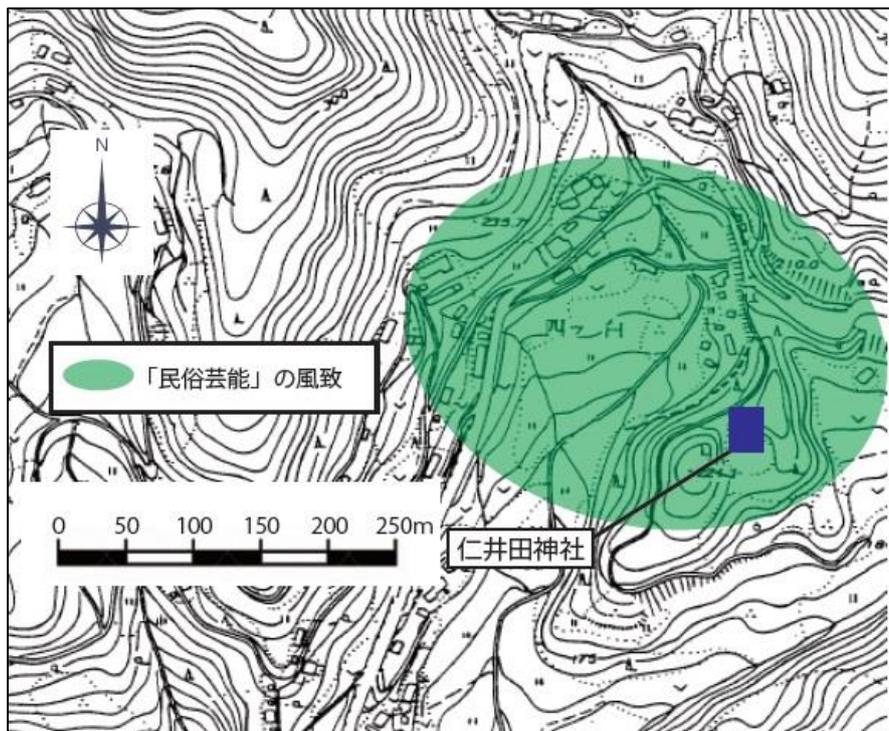
【民俗芸能にみる歴史的風致エリア】



【民俗芸能にみる歴史的風致エリア拡大図（瑞応の盆踊り）】



【民俗芸能にみる歴史的風致エリア拡大図（白倉神社花取踊）】



【民俗芸能にみる歴史的風致エリア拡大図（土佐の太刀踊）】